

若者の意識に関する調査
(ひきこもりに関する実態調査)
報 告 書
(概要版)

平成 22 年 7 月

内閣府政策統括官 (共生社会政策担当)

目 次

調査の概要	
1 調査目的	1
2 調査項目	1
3 調査対象	1
4 調査時期	1
5 調査方法	1
6 有効回収率	1
ひきこもり群・ひきこもり親和群の定義	
1 ひきこもり群	2
2 ひきこもり親和群	3
3 一般群	3
4 厚生労働省の「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」との整合性	3
調査の結果（抄）（松井豊・渡部麻美）	
1 性別	5
2 年齢	5
3 主生計者	6
4 小中学校時代の学校での経験	7
5 小中学校時代の家庭での経験	8
6 現在の就業状況	10
7 ふだん自宅をよくしていること	11
8 ひきこもりの状態になった年齢	12
9 現在の状態になったきっかけ	13
10 現在の状態について関係機関に相談したいか	14
11 現在の状態をどの機関なら相談したいか	15
12 自身にあてはまること	16
13 不安要素についてあてはまること	18
14 ふだんの生活態度	20
15 悩みを相談する相手	22
16 対人関係と精神症状に関する変数の分析（対人関係の若手意識）	23

企画分析委員からのコメント	
1 高塚雄介「臨床心理学の立場から - ひきこもる若者たちの心は・・・」	2 4
2 吉川武彦「精神医学から見た『ひきこもり』 - 内閣府が実施した本調査とこれまでのわが国における『ひきこもり』調査 の差異に触れて - 」	2 9
3 松井豊・渡部麻美「社会心理学の立場から」	3 3
調査票（単純集計付）	4 0
若者の意識に関する調査企画分析会議構成員名簿	4 8

調 査 の 概 要

1 調査目的

「ひきこもり」に該当する子ども・若者がどの程度存在し、どのような支援を必要としているのかを把握することで、地域支援ネットワークの形成を促進するための基礎資料とする。

2 調査項目

- (1) 基本的属性について (Q1 ~ Q8)
- (2) 学校に関すること (Q9 ~ Q12)
- (3) 就労に関すること (Q13 ~ Q17)
- (4) 普段の活動に関すること (Q18 ~ Q19)
- (5) ひきこもりの状態に関すること (Q20 ~ Q23)
- (6) 相談機関に関すること (Q24 ~ Q26)
- (7) 自分についてあてはまること (Q27 ~ Q29)
- (8) 家庭の状況について (Q30)
- (9) 悩み事の相談に関すること (Q31 ~ 32)

3 調査対象

- (1) 母集団 全国15歳以上39歳以下の者
- (2) 標本数 5,000人
- (3) 抽出方法 層化二段無作為抽出法

4 調査時期

平成22年2月18日 ~ 2月28日

5 調査方法

調査員による訪問留置・訪問回収

6 有効回収率

(1) 有効回収数(率) 3,287人(65.7%)

(2) 調査不能数(率) 1,713人(34.3%)

- 不能内訳 -

転居 346 長期不在 76 一時不在 623

住所不明 83 拒否 515 その他 70 (病気など)

ひきこもり群、ひきこもり親和群の定義

1 ひきこもり群

今回の調査では、社会的自立に至っているかどうかに着目して、以下のように定義する。

「Q20 ふだんどのくらい外出しますか。」について、下記の5～8に当てはまる者

- 5．趣味の用事の時だけ外出する
- 6．近所のコンビニなどには出かける
- 7．自室からは出るが、家からは出ない
- 8．自室からほとんど出ない

かつ

「Q22 現在の状態となってどのくらい経ちますか。」について、6ヶ月以上と回答した者

であって、

「Q23 現在の状態になったきっかけは何ですか。」で、

「病気(病名:)」を選択し、病名に統合失調症又は身体的な病気を記入した者、

「妊娠した」を選択した者、

「その他()」を選択肢、()に自宅で仕事をしている旨や出産・育児をしている旨を記入した者

又は

「Q18 ふだんご自宅にいるときによくしていることすべてに をつけてください。」で、「家事・育児をする」と回答した者

を除いた人数 59人(有効回収率に占める割合1.79%)。

このうち、Q20で6、7又は8に該当する者を「狭義のひきこもり」と、Q20で5に該当する者を「準ひきこもり」とし、「狭義のひきこもり」と「準ひきこもり」の合計を「広義のひきこもり」とする。

なお、総務省「人口推計」(2009年)によれば15～39歳人口は3,880万人なので、広義のひきこもりの推計数は3,880万人×1.79%=69.6万人

同様に、狭義のひきこもりの推計数は $3,880 \text{ 万人} \times 0.61\% = 23.6 \text{ 万人}$ 。

準ひきこもりの推計数は $3,880 \text{ 万人} \times 1.19\% = 46.0 \text{ 万人}$ 。

2 ひきこもり親和群

Q27 11～14の4項目が、すべて「1. はい」又は1項目のみ「2. どちらかといえばはい」と答えた者から「ひきこもり群」を除いた者。

Q27 次にあげられたことについて、あなた自身にあてはまる数字に をつけてください。(は各項目につきひとつ)			
11. 家や自室に閉じこもっていて外に出ない人たちの気持ちがわかる			
はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいいえ	いいえ
12. 自分も、家や自室に閉じこもりたいと思うことがある			
はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいいえ	いいえ
13. 嫌な出来事があると、外に出たくなくなる			
はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいいえ	いいえ
14. 理由があるなら家や自室に閉じこもるのも仕方がないと思う			
はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいいえ	いいえ

ひきこもり親和群の推計数は $3,880 \text{ 万人} \times 3.99\% = 155 \text{ 万人}$

3 一般群

回答者全体から「ひきこもり群」「ひきこもり親和群」を除いた者でQ27 11～14の項目にすべて回答している者。

4 厚生労働省の「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」との整合性

(i) 厚生労働省の「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」の考え方

(ア) 厚生労働科学研究「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究(主任研究者 齊藤万比古)」の研究成果として、「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」(以下「新ガイドライン」という。)がまとめられた(平成22年5月19日)。

(イ) 新ガイドラインでは、「現在のところ最も信頼性の高い調査によると、現在ひきこもり状態にある子どものいる世帯は、全国で約26万世帯と推計される。」としている。

(ウ) この調査は、厚生労働科学研究「こころの健康についての疫学調査に関する研究」(主任研究者 川上憲人)であり、この中で、「ひきこもり」の定義は、「仕事や学校に行かず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせずに、6ヶ月以上続けて自宅

にひきこもっている」状態とし、時々買い物などで外出することもあるという場合も「ひきこもり」に含めるとしている。

(エ) なお、新ガイドラインでは、ひきこもりの定義を次のとおりとしている。

「様々な要因の結果として社会的参加(義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など)を回避し、原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態(他者と交わらない形での外出をしてもよい)を指す現象概念」と定義(概ね従来通り)。

なお、「ひきこもりは原則として統合失調症の陽性あるいは陰性症状に基づくひきこもり状態とは一線を画した非精神病性の現象とするが、実際には確定診断がなされる前の統合失調症が含まれている可能性は低くないことに留意すべき」としている。

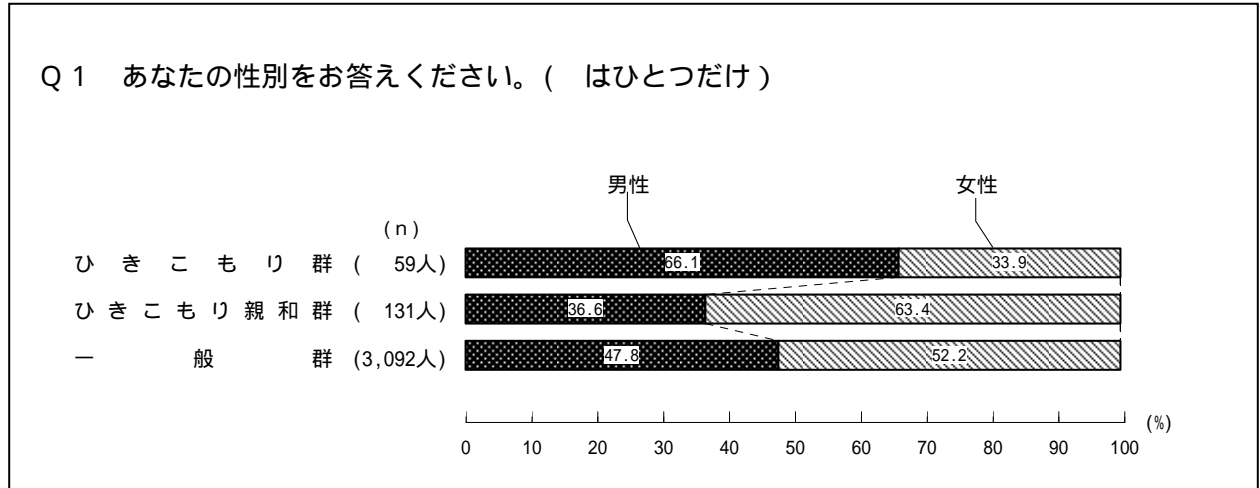
(ii) 新ガイドラインで引用する推計数と今回の調査の推計数との整合的な考え方

	〔該当人数(人)〕	〔有効回収率に占める割合(%)〕	〔全国の推計数(万人)〕	
ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する	39	1.19	46.0	} 準ひきこもり 46.0万人
ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける	13	0.40	15.3	
自室からは出るが、家からは出ない	3	0.09	3.5	} 狭義のひきこもり 23.6万人
自室からほとんど出ない	4	0.12	4.7	
計	59	1.79	69.6	} 広義のひきこもり 69.6万人

今回の調査における広義のひきこもり群のうち、Q20(ふだんどのくらい外出しますか。)について、6、7又は8と答えた「狭義のひきこもり」が、新ガイドラインで引用する推計数にほぼ相当すると考えられる。

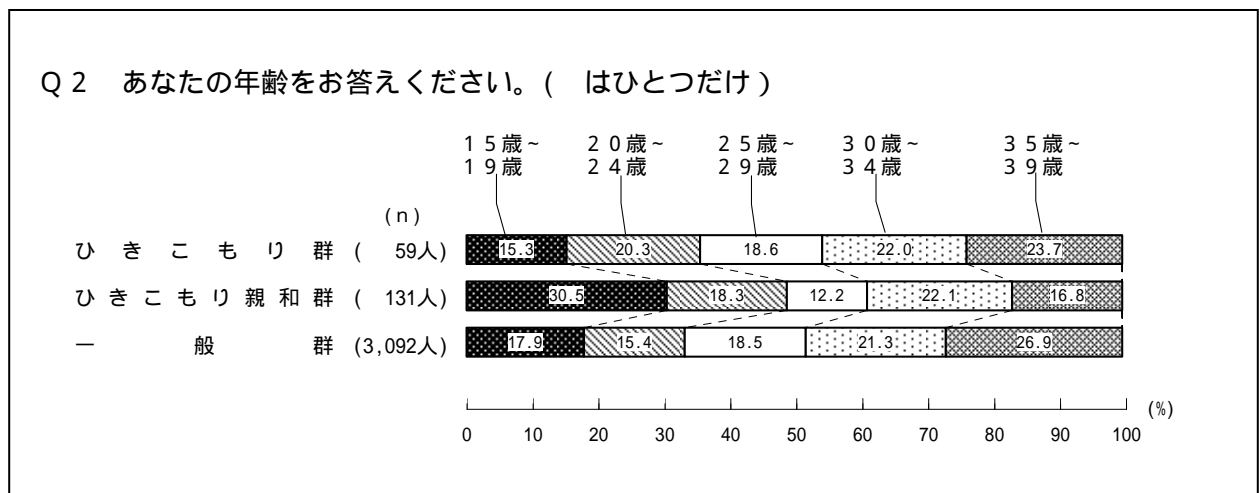
調査の結果（抄）（松井豊、渡部麻美）

1 性別



回答者の性別は、ひきこもり群は男性が多く、ひきこもり親和群は女性が多い傾向が見られた。

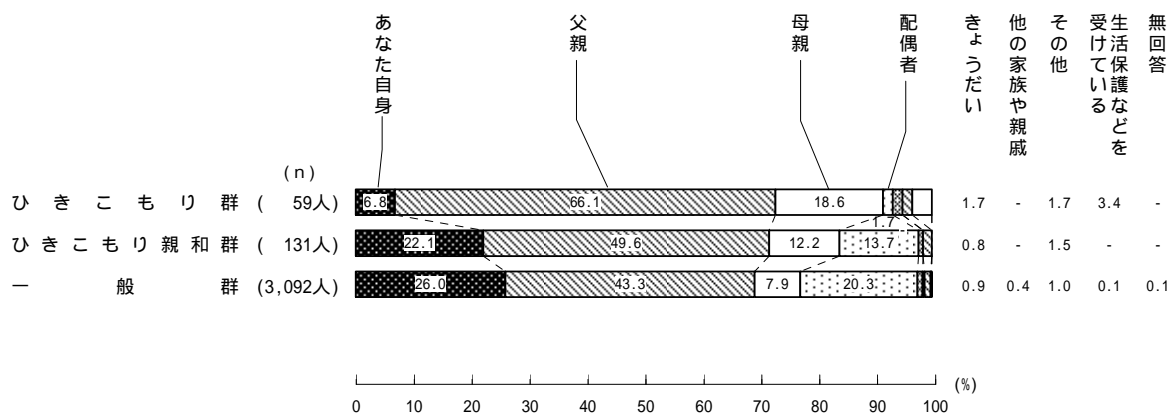
2 年齢



回答者の年齢は、ひきこもり親和群は10代を中心とした若い年齢層に多い傾向が見られた。

3 主生計者

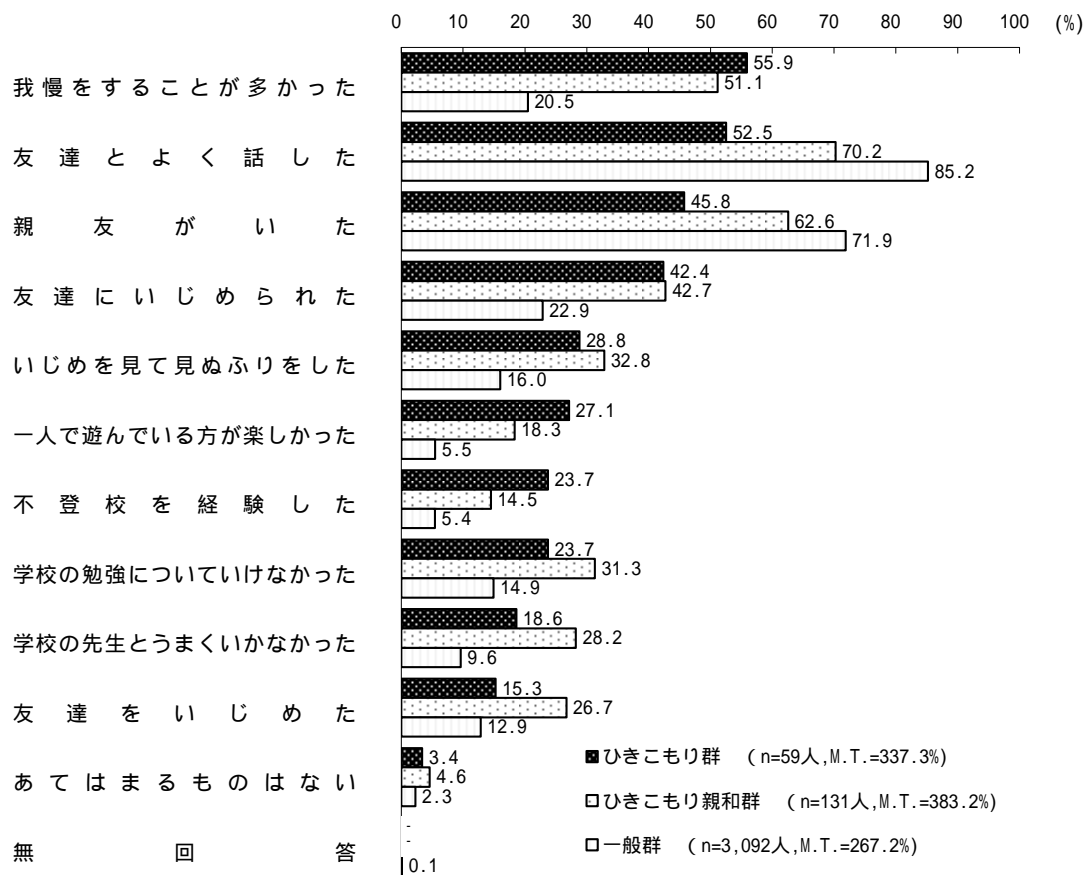
Q5 あなたの家の生計を立てているのは主にどなたですか。生計を立てている方が複数いる場合は、もっとも多く家計を負担している人をお答えください。また、主に仕送りで生計を立てている方は、その仕送りを主にしてくれている人をお答えください。(はひとつだけ)



主な生計維持者を聞いたところ、ひきこもり群の世帯の大部分は両親のいずれかが生計を立てており、本人が生計を担っていることは少ない。しかし、本人が生計を立てている世帯や生活保護を受けている世帯も見られ、ひきこもりのすべてが生活を親に頼っているとはいえない。

4 小中学校時代の学校での経験

Q11 あなたは小学校や中学校の頃に、学校で次のようなことを経験したことがありますか。あてはまるものすべてにをつけてください。(はいいくつでも)

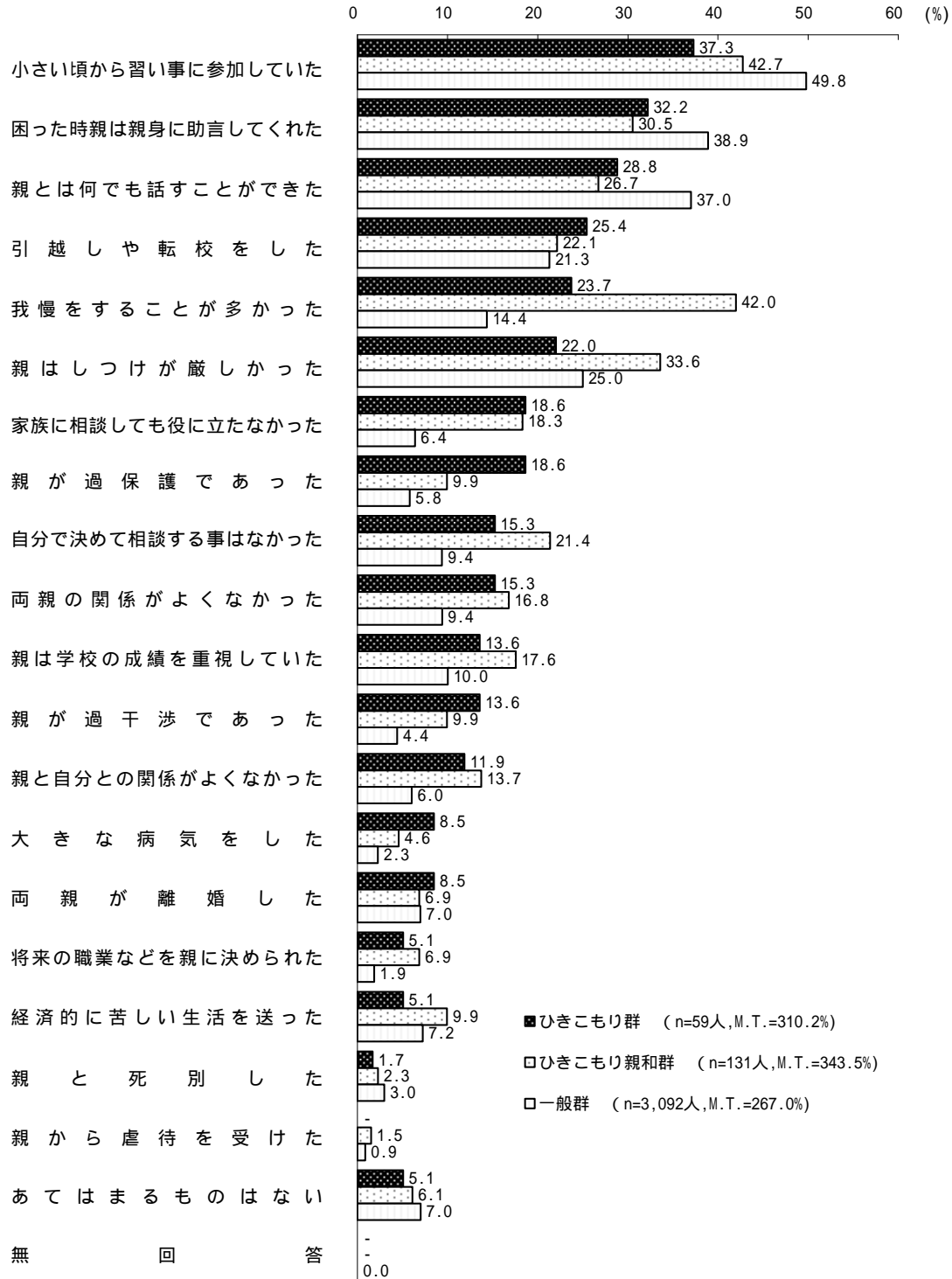


小学校や中学校の頃に学校で経験したことについて聞いたところ、ひきこもり群とひきこもり親和群は、一般群と比較した場合、学校生活において「我慢をすることが多かった」、「友達にいじめられた」、「いじめを見て見ぬふりをした」、「一人で遊んでいる方が楽しかった」、「学校の先生とうまくいかなかった」が多かった。さらに、ひきこもり群とひきこもり親和群は、「友達とよく話した」や「親友がいた」が一般群よりも少なかった。また、ひきこもり群とひきこもり親和群は、「不登校を経験した」も多く、学校生活になじめなかった者が多いと考えられる。

さらに、ひきこもり親和群では、「学校の勉強についていけなかった」や「友達をいじめた」も多かった。

5 小中学校時代の家庭での経験

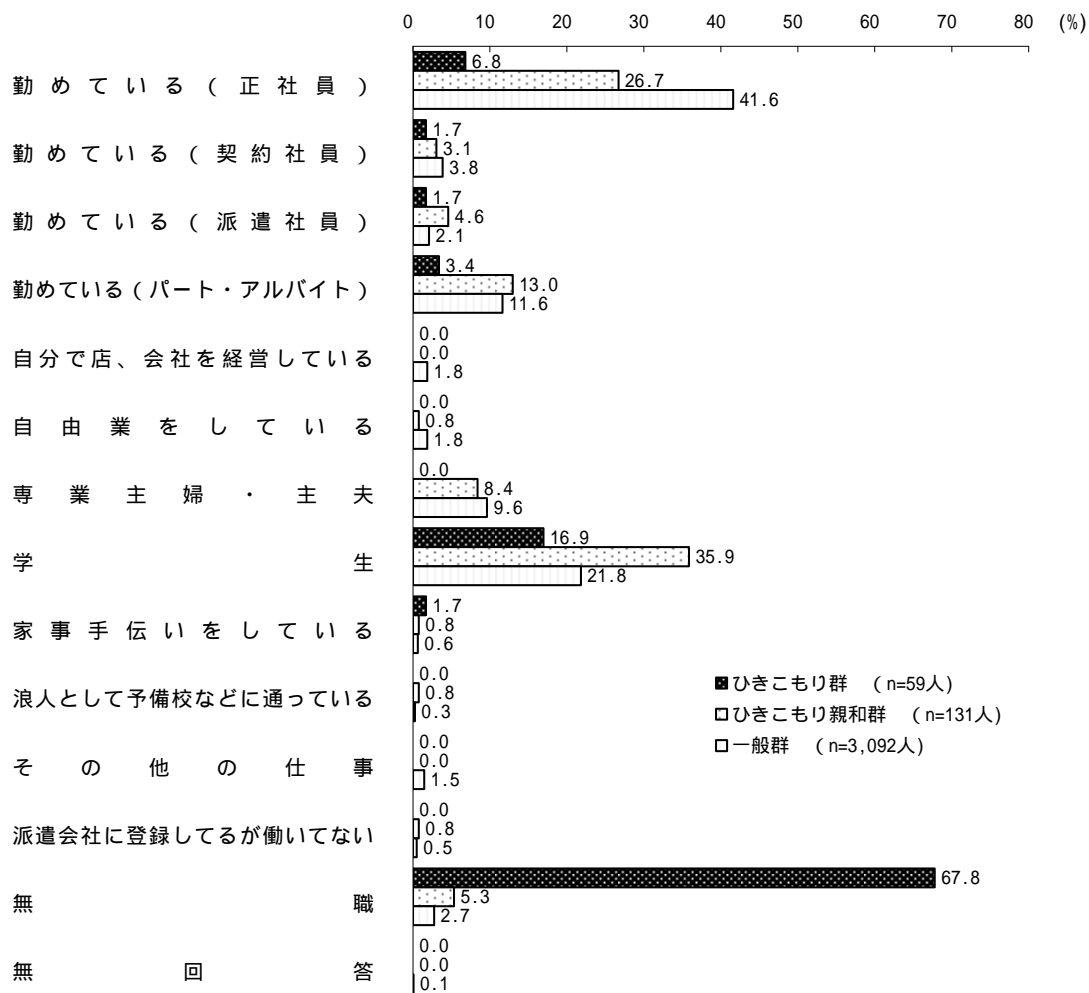
Q12 あなたは小学校や中学校の頃に、家庭で次のようなことを経験したことがありますか。
あてはまるものすべてに をつけてください。(はいいくつでも)



小学校や中学校の頃に、家庭での経験を聞いたところ、ひきこもり群は、ひきこもり親和群や一般群に比べて、「親が過保護であった」や「大きな病気をした」が多かった。ひきこもり親和群は「我慢をすることが多かった」、「自分で決めて相談することはなかった」、「両親の関係がよくなかった」、「親は学校の成績を重視していた」、「親と自分の関係がよくなかった」、「将来の職業などを親に決められた」が多く、「親とは何でも話すことができた」が少なかった。ひきこもり群、ひきこもり親和群ともに、「家族に相談しても役に立たなかった」や「親が過干渉であった」が一般群よりも多かった。

6 現在の就業状況

Q13 あなたは現在働いておられますか。(はひとつだけ)

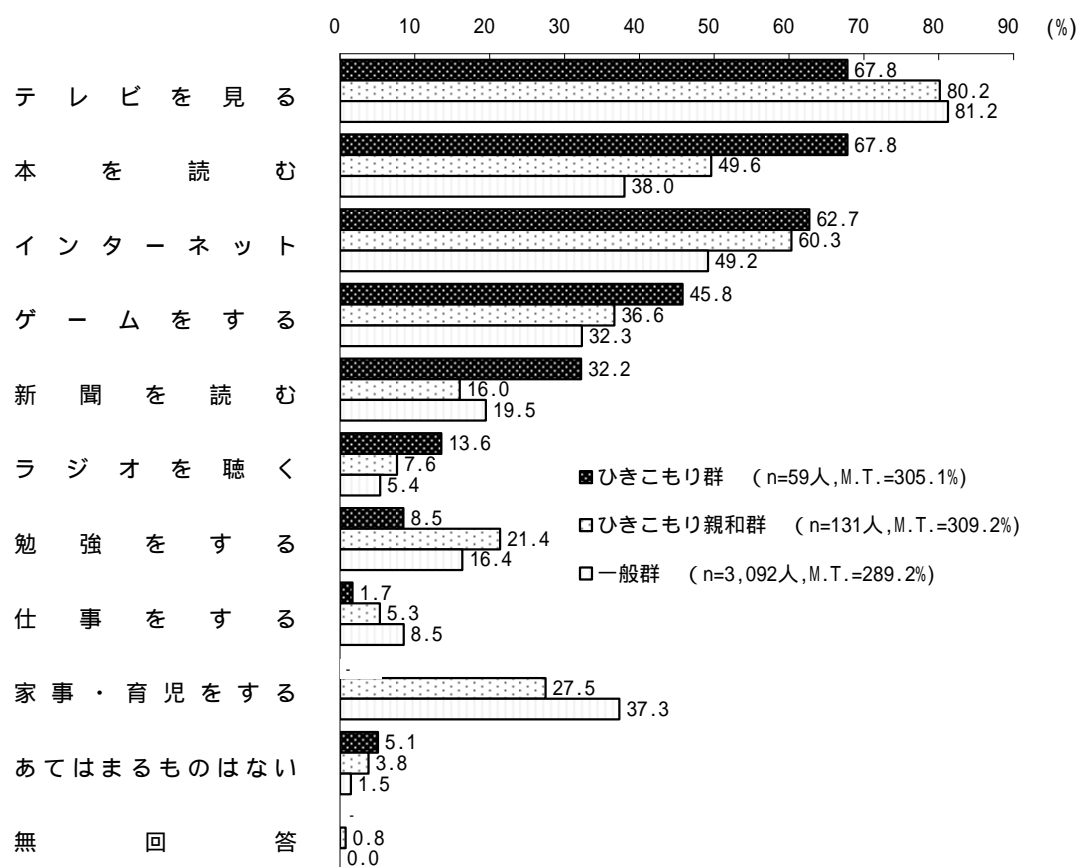


現在の就業状況を聞いたところ、ひきこもり群は「無職」が中心となっており、ひきこもり親和群は「学生」が多かった。

なお、ひきこもり群でありながら「勤めている(正社員)」というのは、例えば長期休職中などが想定される。

7 ふだん自宅をよくしていること

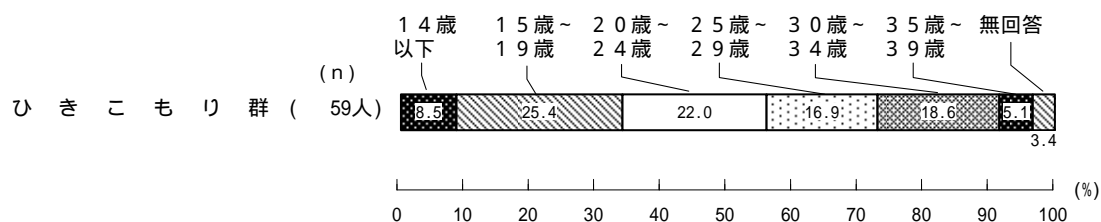
Q18 ふだんご自宅にいるときによくしていることすべてに をつけてください。
(はいいくつでも)



ふだん自宅にいるときによくしていることを聞いたところ、3群を比較するとひきこもり群とひきこもり親和群は、「本を読む」や「インターネット」、「あてはまるものがない」が多く、「家事・育児をする」が少なかった。また、ひきこもり群は、「ラジオを聴く」や「新聞を読む」が多く、「テレビを見る」は比較的少なかった。

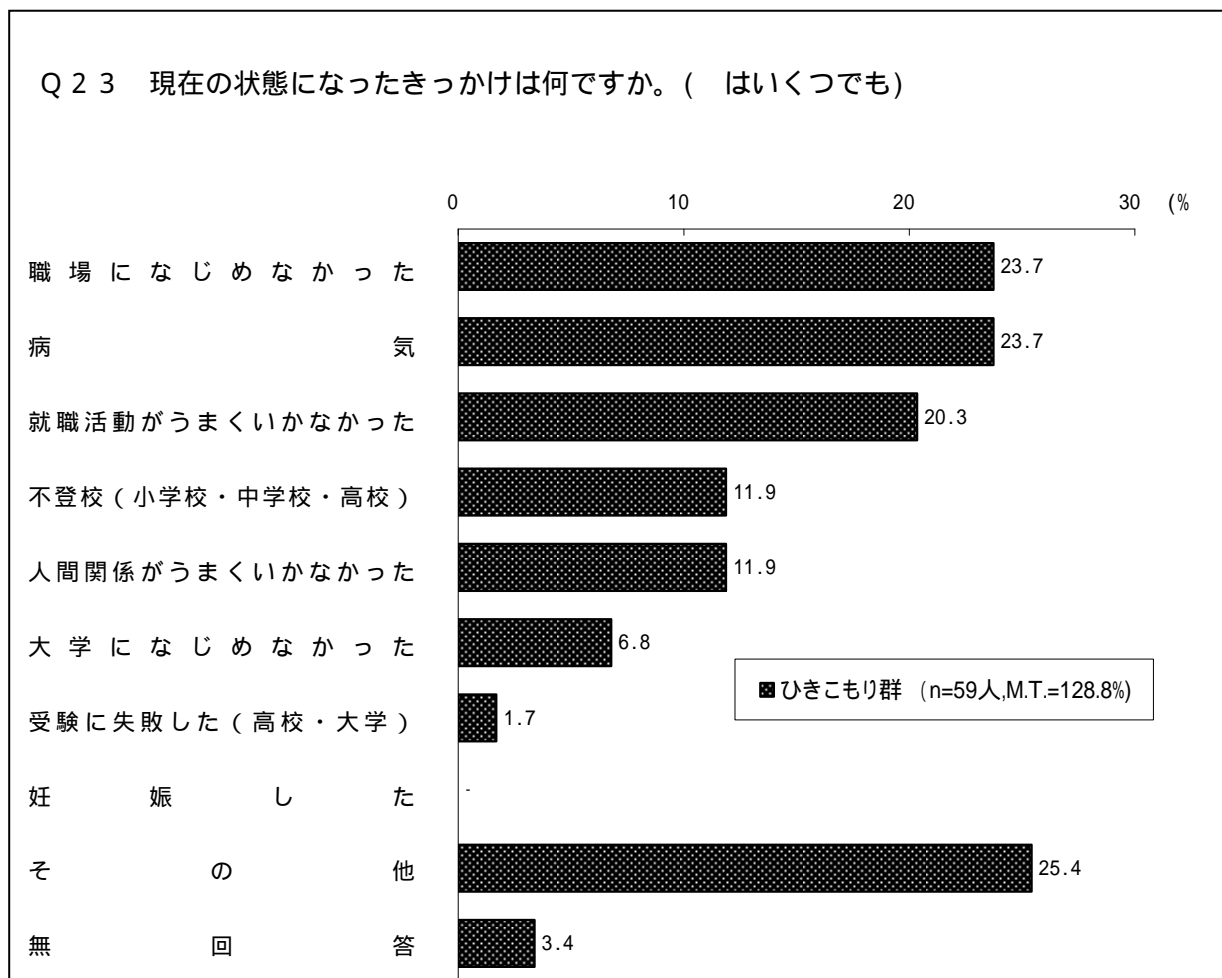
8 ひきこもりの状態になった年齢

Q 2 1 現在の状態になったのは、あなたが何歳の頃ですか。(数字で具体的に)



「14歳以下」(8.5%)及び「15歳~19歳」(25.4%)を合わせると33.9%となり、3割強の者が10代のうちにひきこもりの状態になっていた。一方、「30歳~34歳」(18.6%)及び「35歳~39歳」(5.1%)を合わせると、30代でひきこもり始めた者も23.7%いることが明らかとなった。

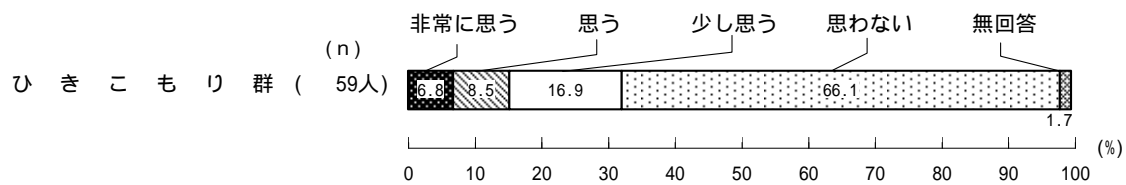
9 現在の状態になったきっかけ



現在の状態になったきっかけを聞いたところ、「職場になじめなかった」(23.7%)と「就職活動がうまくいかなかった」(20.3%)を合わせると44.0%となり、仕事や就職に関するきっかけによってひきこもった者が多かった。「不登校(小学校・中学校・高校)」(11.9%)や「大学になじめなかった」(6.8%)は、合計しても18.7%にとどまっていた。

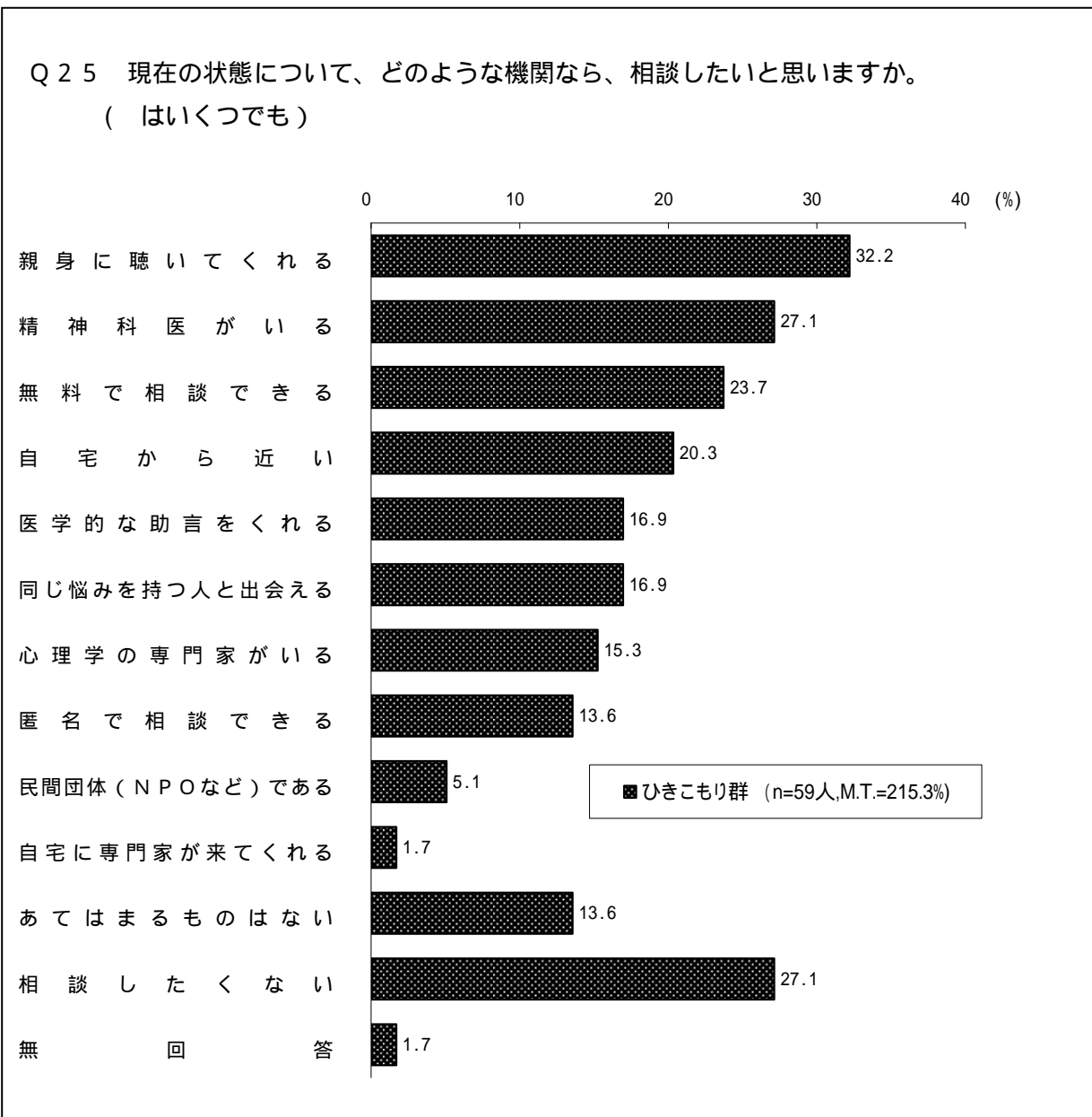
10 現在の状態について関係機関に相談したいか

Q24 現在の状態について、関係機関に相談したいと思いますか。(はひとつだけ)



現在の状態について、関係機関に相談したいか聞いたところ、「思わない」を選択した者が66.1%と最も多く、ひきこもり群では関係機関への相談を避ける傾向があった。

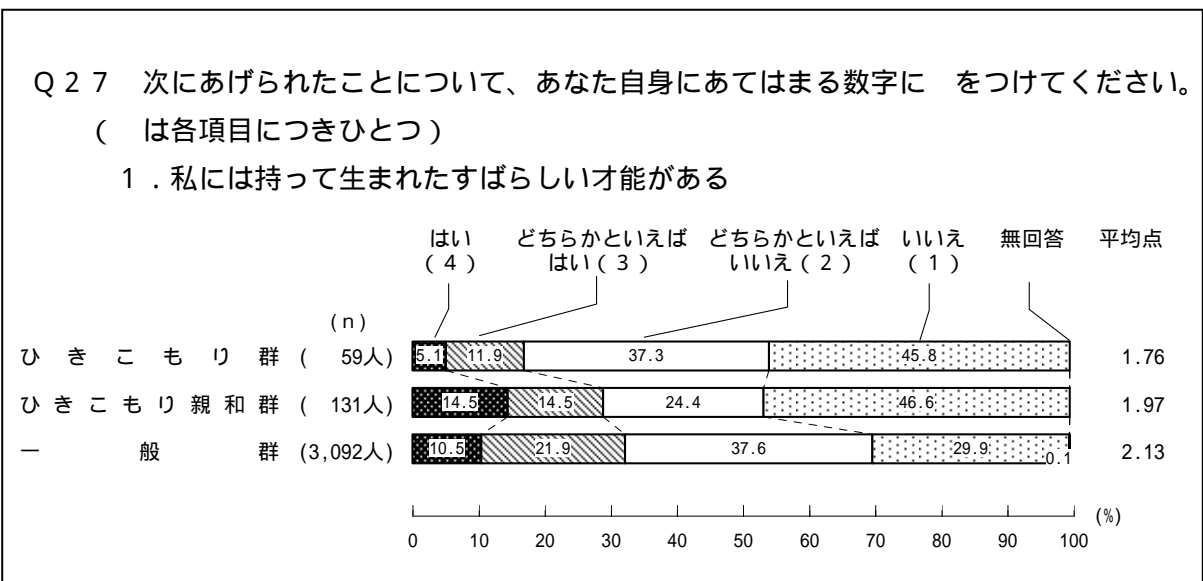
1 1 現在の状態をどの機関なら相談したいか



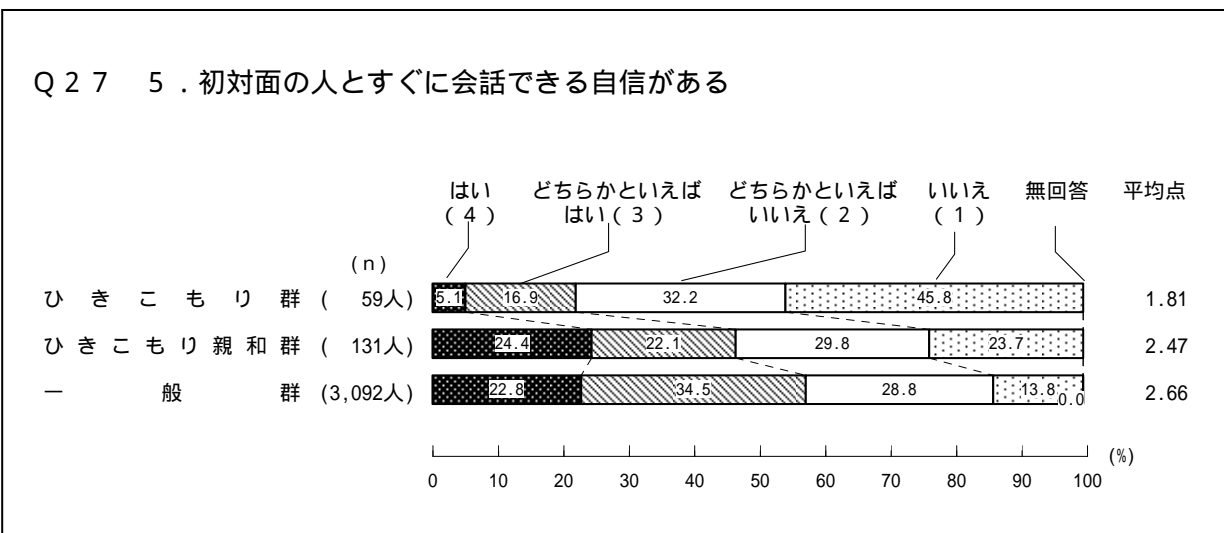
ひきこもり群の者は、自分の話を「親身に聴いてくれる」相談機関を最も求めている（32.2%）ことが明らかとなった。その一方で、「相談したくない」も27.1%と多く、相談機関の条件に関わらず相談を避ける者も存在することが示された。

1 2 自身にあてはまること

あなた自身にあてはまるかどうか14項目について聞いた。

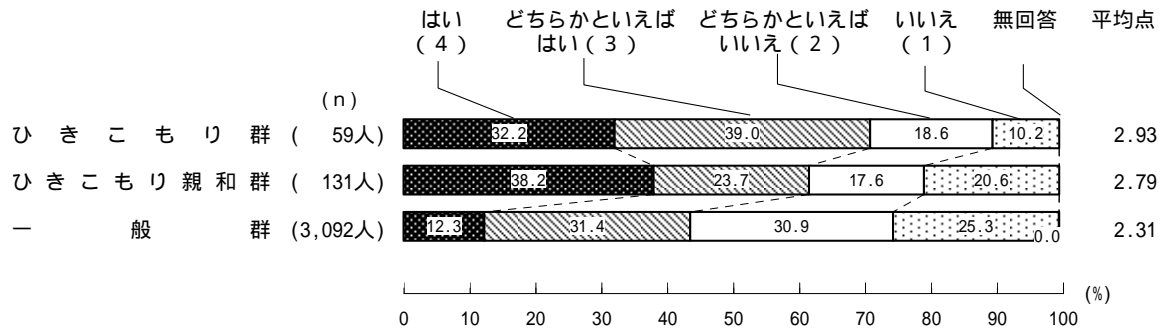


『私には持って生まれたすばらしい才能がある』について聞いたところ、ひきこもり群は、一般群と比べて自分の持って生まれた素質についての自信が低い傾向があった。



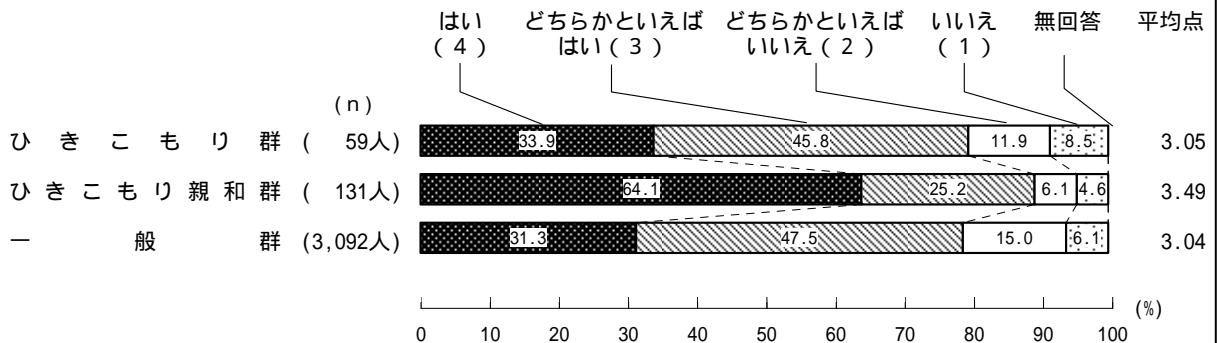
『初対面の人とすぐに会話できる自信がある』について聞いたところ、ひきこもり群は、ひきこもり親和群や一般群と比べて、初対面の人との関わり方に自信がない傾向があった。

Q 2 7 7 . 自らの感情を表に出すのが苦手だ



『自らの感情を表に出すのが苦手だ』について聞いたところ、ひきこもり群とひきこもり親和群は、一般群と比べて、自己表現が苦手であると感じていた。

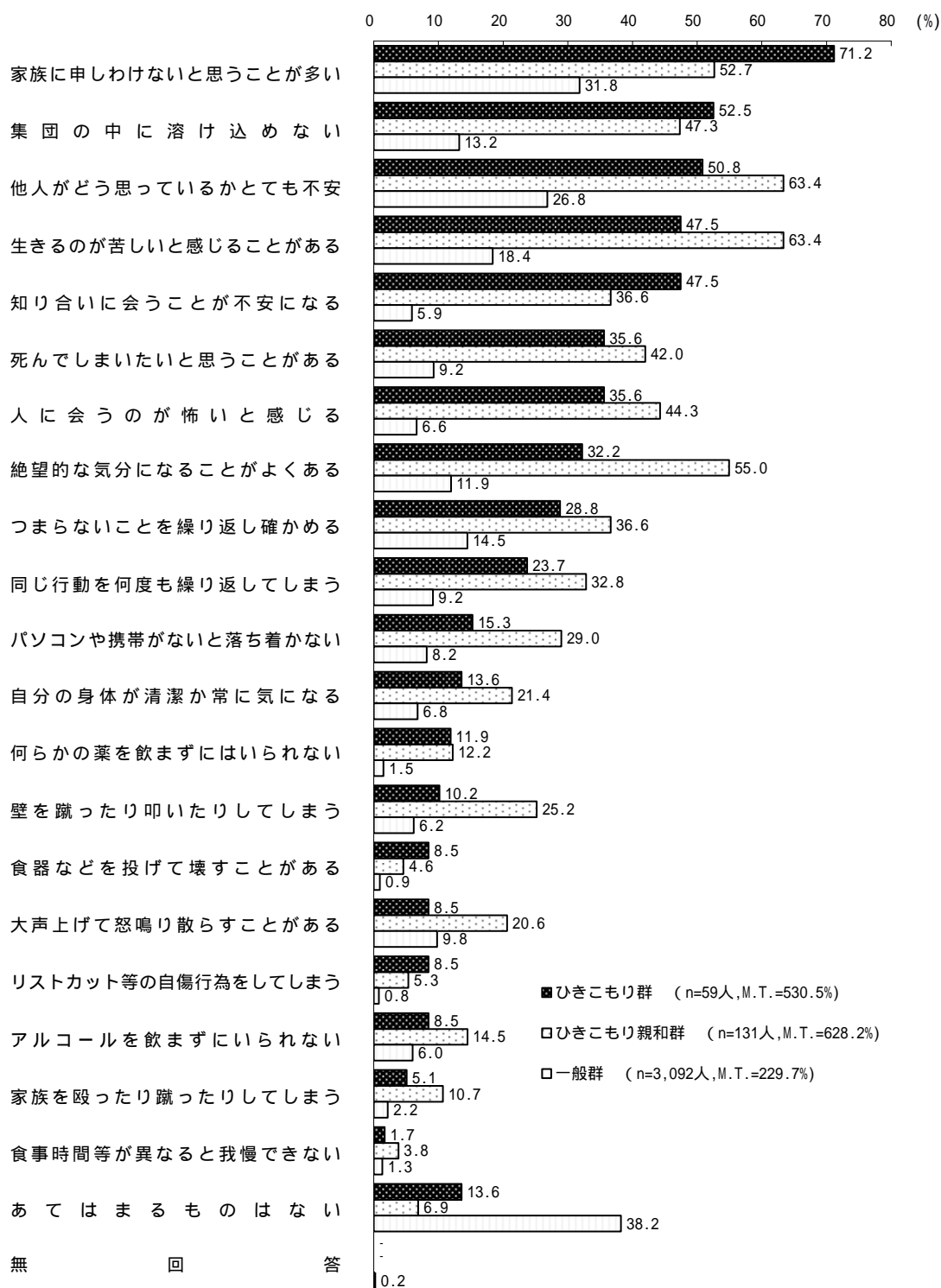
Q 2 7 1 0 . 自らの生活のことで人から干渉されたくない



『自らの生活のことで人から干渉されたくない』について聞いたところ、ひきこもり親和群は、ひきこもり群や一般群と比べて、自らの生活の仕方に他者が干渉することを嫌う傾向があった。

1.3 不安要素についてあてはまること

Q28 次にあげられたことの中で、あなた自身にあてはまるものすべてにをつけてください。(はいいくつでも)



不安などの項目であてはまるものを聞いたところ、ひきこもり群では、「家族に申し訳ないと思うことが多い」をあげた者が71.2%と最も多く、以下、「集団の中に溶け込めない」(52.5%)、「他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる」(50.8%)、「生きるのが苦しいと感ずることがある」「知り合いに会うことを考えると不安になる」(47.5%)となっていた。

ひきこもり親和群では、「他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる」(63.9%)、「生きるのが苦しいと感ずることがある」(63.4%)をあげる者が多く、次いで「絶望的な気分になることがよくある」(55.0%)、「家族に申し訳ないと思うことが多い」(51.6%)となっていた。

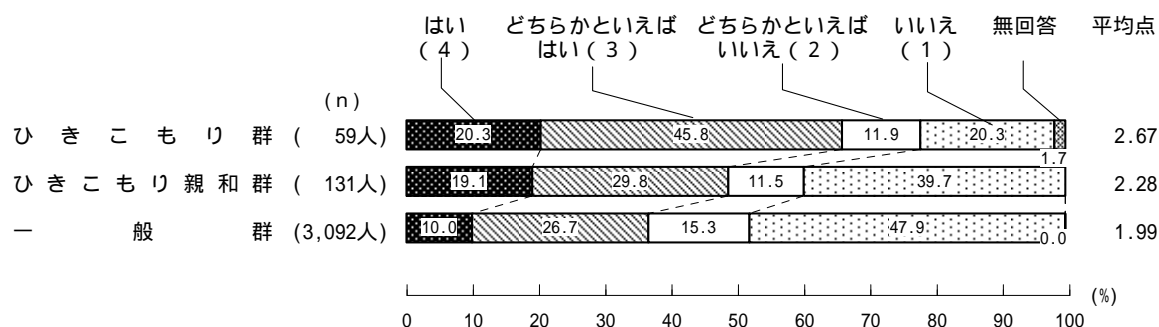
一般群では「あてはまるものはない」が最も多く(38.2%)、『ひきこもり群』、『ひきこもり親和群』と比べ、不安なことをあげる者が少なくなっていた。

1.4 ふだんの生活態度

あなた自身にあてはまるかどうか12項目について聞いた。

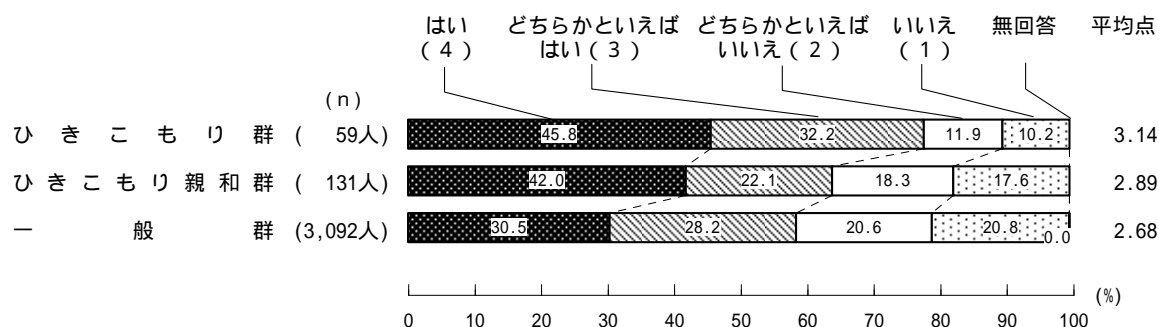
Q29 次にあげられたことについて、あなた自身にあてはまる数字に をつけてください。
(は各項目につきひとつ)

1. 身の回りのことは親にしてもらっている



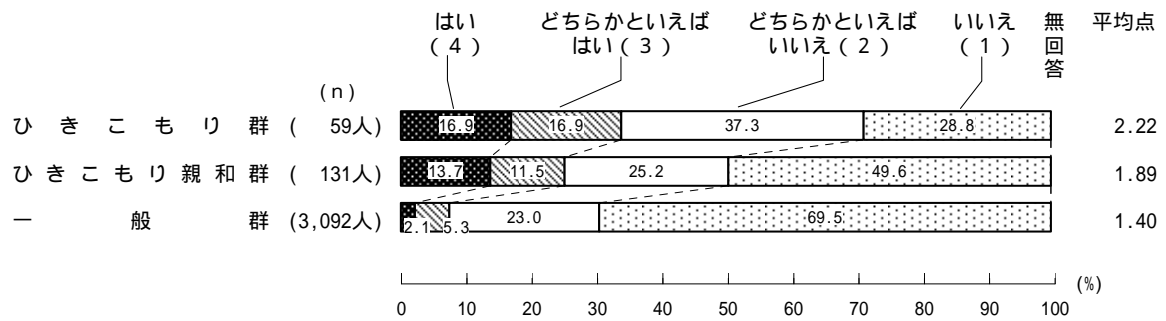
『身の回りのことは親にもらっている』について聞いたところ、ひきこもり群とひきこもり親和群は、一般群と比較して、身の回りのことを親に頼る傾向が高かった。

Q29 4. 深夜まで起きていることが多い



『深夜まで起きていることが多い』について聞いたところ、ひきこもり群は、一般群に比べて、深夜まで起きていることが多かった。

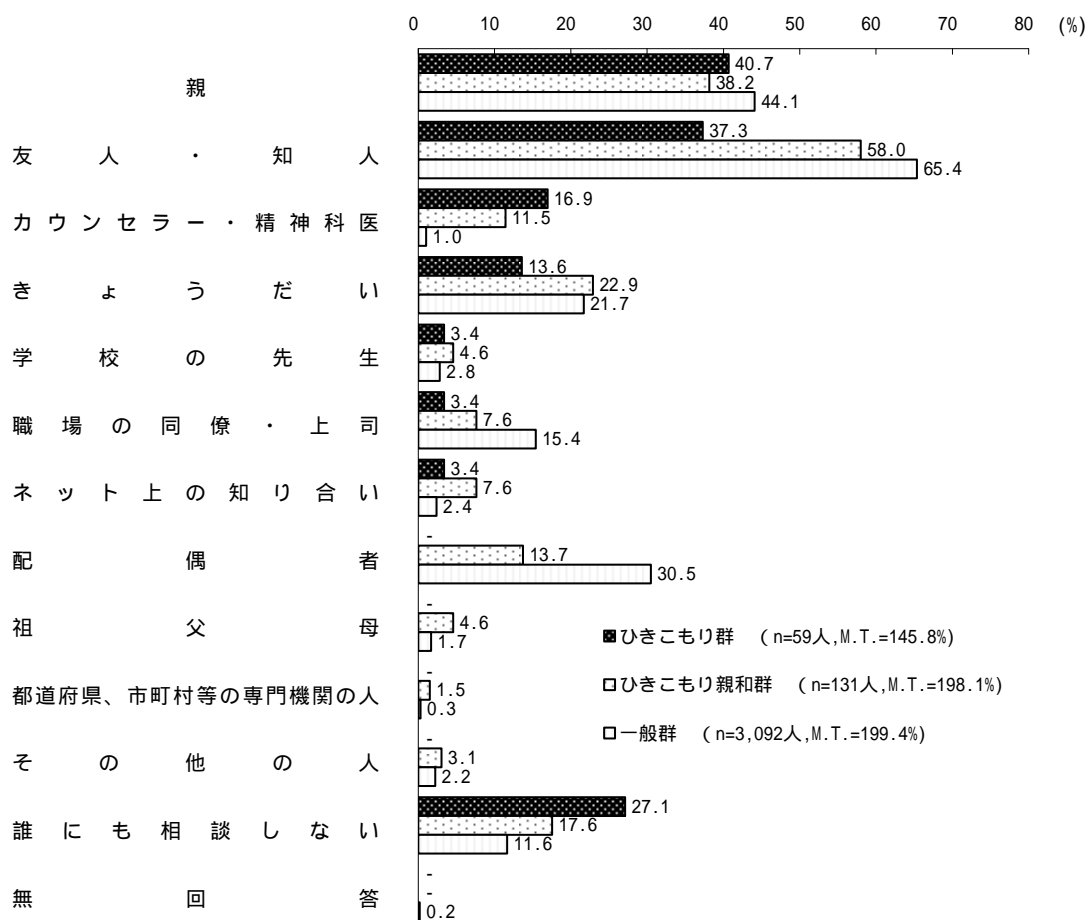
Q 2 9 1 0 . 過去の知り合いや縁者に信頼できる人はいない



『過去の知り合いや縁者に信頼できる人はいない』について聞いたところ、ひきこもり群は、知り合いを信頼できないと感じる傾向が3群の中で最も高く、次いでひきこもり親和群が高くなっていた。

1 5 悩みを相談する相手

Q 3 2 あなたはふだん悩み事を誰に相談しますか。(はいくつでも)



悩みを相談する相手について聞いたところ、ひきこもり群は、ひきこもり親和群や一般群と比べて、「友人・知人」(37.3%)が少なく、「誰にも相談しない」(27.1%)が多かった。ひきこもり親和群は、他の2群よりも「ネット上の知り合い」(7.6%)や「祖父母」(4.6%)が多かった。また、ひきこもり群、ひきこもり親和群ともに、一般群よりも「配偶者」(ひきこもり群0.0%、ひきこもり親和群13.7%)、「職場の同僚・上司」(ひきこもり群3.4%、ひきこもり親和群7.6%)が少なく、「カウンセラー・精神科医」(ひきこもり群16.9%、ひきこもり親和群11.5%)を相談相手とすることが多かった。

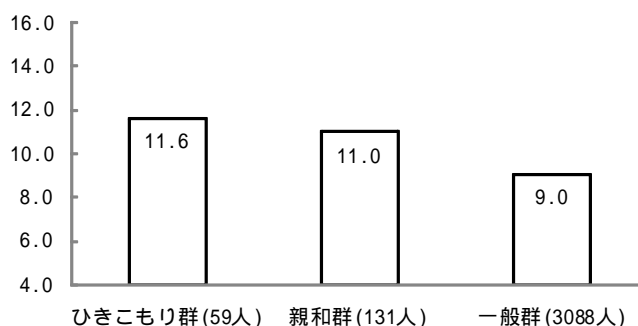
16 対人関係と精神症状に関する変数の分析（対人関係の苦手意識）

ひきこもり群、ひきこもり親和群、一般群の対人関係や精神症状について比較するために、対人関係の苦手意識、うつ・罪悪感、対人恐怖、強迫、暴力、依存、家族との情緒的絆について以下の分析を実施した。

Q27の項目のうち、下に示した4項目の合計点を「対人関係の苦手意識」得点とした（調査実施の際の選択肢は、「1. はい」「2. どちらかといえばはい」「3. どちらかといえばいいえ」「4. いいえ」であったが、得点が高いほど「対人関係の苦手意識」が高いことを示すように、「1. はい」は4点といった逆転処理を行なった上で合計した（逆転項目については質問の意味が逆転しているため、「1. はい」は1点といった処理を行った上で合計した。）。可能な得点範囲は4点から16点である。

対人関係の苦手意識

- 「Q27 5. 初対面の人とすぐに会話できる自信がある（逆転項目）」
- 「Q27 6. 人づきあいが不器用なのではないかと悩む」
- 「Q27 7. 自分の感情を表に出すのが苦手だ」
- 「Q27 8. 周りの人ともめごとが起こったとき解決方法がわからない」



3群の「対人関係の苦手意識」得点を比較したところ、ひきこもり群（11.6）とひきこもり親和群（11.0）は、一般群（9.0）と比較して対人関係の苦手意識が高いことが明らかとなった。

企画分析委員からのコメント

1 高塚雄介「臨床心理学の立場から－ひきこもる若者たちの心は・・・」

明星大学大学院人文学研究科長
高塚 雄介

1. 臨床の立場からすると「ひきこもり」という状態を呈する人に出会うことは、そう珍しいことではない。医療の現場では、何らかの精神疾患や障害を抱えた人たちが、その病理からもたらされる症状のひとつとして「ひきこもり」という状態を呈する場合もあれば、その障害を有するために周囲との隔絶や、心理的ひずみもたらされ、いわば二次的障害としての「ひきこもり」状態に陥る場合もある。

戦争や過酷な状況下に置かれた場合、ひと段落した途端に虚無感や虚脱感に襲われ、アノミー的にひきこもっていく人間が多く存在することもよく知られている。あるいはまた、合格率の低かった頃の司法試験に何度も挑戦しながら本懐を果たせず「ひきこもり」状態になっていた人もかつては多く存在していたし、進学競争が過熱していく中で、志望を果たせなかった学生たちの中に多発したスチューデント・アパシー（無気力）と呼ばれる者たちも、やはり「ひきこもり」状態を呈していった。ただ、これらの「ひきこもり」化していく若者たちというのは、そこに至る経緯もわからないではないし、それなりの対処方策が考えられたものである。

しかし、1990年代半ば頃から急に注目されるようになった今日的な「ひきこもり」現象の増加に関しては、その原因や背景も判然とせず、それだけにどう対処していいかがなかなか見えてこない。

2. 初期の頃は、「不登校」と関連付けた考察や意見が多く見られた。不登校が遷延化してやがて、「ひきこもり」になるという考え方である。また、医療の世界では、当時やはり注目されるようになった発達障害や、WHO（世界保健機構）が示すところの国際障害者分類に照らして認識しようとする動きが生まれた。だが、臨床心理学的な立場から、実際の「ひきこもり」の若者と関わっていくとどちらも釈然としないというのが偽らざる気持ちである。

不登校や何らかの障害を抱えて「ひきこもり」状態を呈する若者たちももちろん一定程度存在している。しかし、そのどちらにも該当しない「ひきこもり」の方がはるかに多いという印象を持たざるをえなかった。ちなみに国際障害者分類に照らして「ひきこもり」をとらえようとする場合には、その対処策として、従来デイケアなどにおいて行われていたSS（ソーシャルスキル・トレーニング）が有効であるとされる。国際障害者分類の最初(1980)に提示された分類では、機能障害(IMPAIRMENT)・生活障害(DISABILITY)・社会的適応障害(HANDICAP)という言葉掲げて説明している。確かに、「ひきこもり」の状態は生活障害、社会的適応障害には該当するように思える。しかし、機能障害は存在しているのだろうか。多くの「ひきこもり」の

人が訴える、人間関係の困難さを機能障害であるとする見方もある。2001年に国際障害者分類は改定され、生活機能と障害並びに背景因子から説明が行われるようになり、「心身機能・身体構造」「活動」「社会参加」という三つの次元と「環境因子」「個人因子」との関連を見ていくという、極めて多角的な観点から障害を見ようとする方向が示された。こうした観点からすると「ひきこもり」も障害の一類型としてみなすことへの根拠が以前よりは了解しうるものとなる。しかし、発達障害や知的障害などのように生理学的な要因(と推定される)から生じていると考えられる機能不全状態と、人間関係を難しいとする状態を同列に置くことの是非というのは、もっと議論することが必要であろう。当事者からのクレームもかなりある。「ひきこもり」の多くが「人間関係」に対する緊張や不安・抵抗感をあげているのは事実だが、それは、置かれている社会状況、本人の資質、価値意識といったものが複雑に関係してくるものであって、あえて孤立した状態を好むものも存在するからである。

つまり、きわめて心理的な要因が介在してくる。現代社会は、人間関係を重視し(実態はほとんど希薄化しているにも関わらず)スムーズにそれを実践できないということを異常なことと見なしてしまうところがある。精神保健という観点からすれば、大多数の範疇に属さないものを異常と見なすことは厳に戒めなければならないところである。人間関係の軸となるコミュニケーションにしても然りである。今日の社会では内的世界を適切な言語に置き替え、他者を説得できるコミュニケーション能力を育むことが当然視され、結果的にはすべからずディベートをもなしうる人間にならなければならないかのような雰囲気生まれている。つまり、人間関係をうまく構築したり営むことができなかつたり、きちんと言葉で意思表示をできないことは、あたかも欠陥商品として放逐されかねない社会環境が進行していることに、もっと目を向けてみる必要があるのではないだろうか。無口ではあるが自分の考えをしっかりと有している人間であるとか、言葉に頼らず人の気持ちを「察する」能力を高く持っている人間は、今の日本社会では評価されなくなりつつある。こうした現代社会においては当たり前とされる価値観の進行が、「ひきこもり」化する若者たちにとっては、実に生きにくい社会になっているのではないだろうか。

3. 前に東京都が行った調査など(当事者の面接も含む)によると、「ひきこもり」の当事者というのは、どちらかというともじめで融通がきかなく、言語表現が苦手で人付き合いが苦手であると思っていることが明らかになっている。同様の傾向は今回の内閣府による全国調査からも示されている。調査から示された回答の中で目についたものを拾ってみると、小中学校時代は「一人で遊んでいる方が楽しかった(27.1%)」「我慢することが多かった(55.9%)」とするものが一般群よりはるかに多く、また「本を読む(67.8%)」「新聞を読む(32.2%)」などで他群との違いが示されている。活字離れが指摘され、我慢することのできない若者が目立つようになった現代社会においていささか違う若者の姿が見えてくる。また、「自分の感情を表に出すのが苦手」とするものが消極的な肯定値を加えると71.2%にも上っている。これらの数字を重ねてみていくと、「ひきこもり」の若者たちというのは、現代社会には合わない、時代遅れの者たち

なのではないのかという印象が強い。しかし、その反面「たとえ親であっても自分のやりたいことには口出ししないでほしい（消極的肯定を加えると 71.2%）」「自分の生活のことで人から干渉されたくない（消極的肯定を加えると 79.7%）」などの項目はほぼ一般群と同じ傾向が示されており、現代的な感覚も持ち合わせていることがわかる。つまり、古いだけでなく、近代的な自我と古典的な自我とが共存しているように思われる。臨機応変な融通の効かなさという特徴からすると、現実場面において双方の自我がせめぎ合う状態になることも予測されてくるのだが、そうすると身動きがとれなくなってしまうそうである。学校では何とかやれていても、社会に出てから立ち行かなくなるという理由がそこから示されてくるのではないだろうか。ちなみに不登校から「ひきこもり」になったとした者は、大学での不登校を含めても 20%以下であった。彼らをさらに分析してみると、単に不登校の遷延化が「ひきこもり」になるというのではなく、「ひきこもり心性」とでも言うべきものが早くから存在している不登校者が「ひきこもり」に移行していくように思われる。

4. ところで、「ひきこもり」の実に 66.1%が「趣味の用事の時だけ外出する」と回答している。極めて恣意的かつ選択的な行動パターンを示しているのだが、それができるということは、一定程度の精神的健康度が保持されている存在として見るのが可能であろう。外に出られるなら「ひきこもり」ではないのではないかと見る人もいるだろう。しかし、「6か月以上に渡って仕事も学業もせず、家族以外との交流も途絶えている」という枠組みの中に紛れもなくいる人たちである。

また、親の金で生活しながら、趣味に出かけるなど「甘えている」証拠だという人もいることだろう。しかし、あえて弁護するならば、その世界にかりうじて社会とのつながりを意識している動きであると仮定するならば、現状打開に希望が持てる人たちであると考えたい気がする。かつて「オタク族」と呼ばれる若者たちが注目された時があった。彼らの場合は趣味を共有することでかすかに外での人間関係を保持していたのだが、いつの頃からか、それさえも切ってしまった存在として、「ひきこもる若者たち」の実態が浮かび上がってくる。せめてオタク族的な他者との交流が持てるようになることが、社会参加の第一歩になるとも考えられる。その一方、この項目には肯定しなかった残りの 1/3 の人たちの中には、何らかの病理や障害を抱えている人たちが含まれている可能性があると思われる。

5. 一般群に比べると低い数値を示しているとは言え、ひきこもり群であっても、小中学校時代に「友達とよく話した（52.5%）」や「親友がいた（45.8%）」という回答も注目に値する。また、相談相手として親（40.7%）をあげ、「家族に申しわけないと思うことが多い（71.2%）」としている者が少なくない。「普段悩みごとを誰かに相談したいと思いませんか」という設問に対しては、消極的なものを含めると 71.3%が肯定の意味を見せるなど、「ひきこもり」に対する対応策として可能な方策は全くないとは言い難い。ただ、残念ながら既存の相談機関に対する印象や期待はその意思に添っていないようである。いずれにしてももう少し分析を深めることによ

って、ひきもりを未然に防ぐ方策というのもありそうな気がする。

6. 気になるのは「ひきこもり親和群」と呼ぶ一群の存在である。調査時点では仕事や学業に就いていたり、外出をすることにも抵抗はなく、友人関係も存在していることが示されてはいるのだが、Q27の「家や自室に閉じこもっていて外に出ない人たちの気持ちがわかる」「自分も、家や自室に閉じこもりたいと思うことがある」「嫌な出来ごとがあると、外に出たくなくなる」「理由があるなら家や自室に閉じこもるのも仕方がないと思う」という項目に同意を示した人たちである。

その出現率は3.99%にのぼり、全国に約155万人が存在するという推計がなされている。決して小さな数字ではない。この回答だけならば若い世代にありがちな、感覚的同調意識と見なして無視することも出来るのだが、他の回答を見ていくと、明らかに一般群の若者たちとは異なる傾向を示しており、多くの点で「ひきこもり群」に近い「一般群」と「ひきこもり群」との中間にある傾向を示している。その特徴については、松井・渡部が興味深い指摘をしているが、それとは違う角度からの分析を試みたいと思う。

まず、「ひきこもり親和群」の特徴としてうつ病的傾向、罪悪感・強迫的傾向、暴力的傾向が他群より強いことが示されている。しかし、「ひきこもり親和群」の通院歴を尋ねたところの回答では、精神的というよりも「皮膚の病気」「その他の病気」「胃や腸の病気」をあげたものが多く、一過性の心身症的病気を抱えている者が多いのではないかと推測される。さらに、親和群は約2/3が女性であるのだが、これまで報告されている症例などから、リストカットや摂食障害といった行動化しやすい(攻撃性を内包している)病気を有する者には、どちらかということと女性の方が多いということが指摘されている。ひきこもりが男性の方に出現しやすいということと重ねて今後は検討してみる必要があるのかもしれない。

しかし、「ひきこもり親和群」の心的世界は「ひきこもり群」と重なるものが多く、家族との情緒的絆が弱いことや、対人関係に難を抱えるなどといった問題が浮き上がっている。そうした心的状態の形成される背景を考察してみると、「ひきこもり親和群」は小・中学校時代に「いじめを見て見ぬふりをした(32.8%)」、「学校の勉強についていけなかった(31.3%)」、「学校の先生とうまくいかなかった(28.2%)」、「友達をいじめた(26.7)%」の項目で他群を上回っている。一方、同じく小・中学校時代の家庭での経験としては「我慢をすることが多かった(42.0%)」、「親はしつけが厳しかった(33.6%)」、「自分で決めて相談する事はなかった(21.4%)」、「親は学校の成績を重視していた(17.6%)」などの項目で他群を上回っている。他方で、「困った時親は親身に助言してくれた」、「親とはなんでも話すことができた」という項目での肯定率は他群に比べると低いという点が注目される。そこから浮かび上がってくるのは、家庭においては特に問題性を感じさせず、親もまた子どもの教育にはそれなりの熱意を持って関わろうとしているのだが、子どもは早くから自立することを求められており、その反動からか学校社会では対教師や対友人との関わりに問題が顕在化しやすいのではないかという推測が生まれる。見方を変えると家の外の方が生の感情を露呈しやすく、その分外的世界にむしろ生の充実感のようなも

の感じているのかもしれない。

全体的な傾向としては「ひきこもり群」と良く似てはいるのだが、「ひきこもり群」が、学校で「我慢することが多かった(55.9%)」と他群を抜いて多いのに比べると「ひきこもり親和群」は家庭で我慢することの方がより多いという違いがある。家の内と外とで我慢の違いがあるとすれば、「ひきこもり群」は外の世界よりも家の内の方が居心地が良いということになるかもしれない。また、「ひきこもり親和群」は、年齢的には25歳以下が約半数であり、さらに現在在学中としている者が多く(37.4%)、学歴面では約半数が高校以下であるのに比べ、「ひきこもり群」では、約2/3が専門学校以上の学歴をあげており、成熟度、意識差などの違いが表れているのかもしれない。しかし、そうだとすると「ひきこもり親和群」の中からやがて「ひきこもり」になっていく可能性を持つ者がやはり一定程度存在するという予測は出来そうである。現段階における傾向からすると、特に男性の「ひきこもり親和群」にその確率が高いような気がする。

2 吉川武彦「精神医学から見た『ひきこもり』 - 内閣府が実施した本調査とこれまでのわが国における『ひきこもり』調査の差異に触れて - 」

中部学院大学大学院人間福祉学研究科 教授
独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 名誉所長
吉川 武彦

はじめに

常にお断りしてきたことであるが、「ひきこもり」は精神医学概念ではないことである。現象としての「ひきこもり」状態にある人の中には確かに精神疾患をもつものも見られるが、「ひきこもり」状態をもって精神疾患が示す一症状ということはできないばかりか、「ひきこもり」を精神疾患の診断名として用いることはできない。

では「ひきこもり」状態を精神医学ではどのように見てきたのであろうか。まずはそのことに触れないわけにはいかないだろう。もちろんここではその詳細に触れる余裕はないが、以下のことだけは押さえておきたい。

1. 「自閉」と「自閉症」の概念について

「自閉」概念は精神病理学に発していると言っていい。1911年にプロイラー（E. Bleuler）は「内的生活の比較的あるいは絶対的優位を伴うところの現実離脱」した状態を「自閉」と定義し、統合失調症はもとより神経症や人格障害にもこうした「自閉」が見られるといい、外界は現実的意味を失い「自分だけの空想的世界にのみ生きる」と説明した。ジャンネ（P. Janet）らは「現実的機能を喪失した」がゆえに「自閉」状態に陥ると説明したし、ミンコフスキー（E. Minkowski）は「現実との生きた接触の喪失」が「自閉」であると説明し「貧しい自閉」と「豊かな自閉」があることを指摘した。ピンスワンガー（L. Binswanger）は、自らの周囲の世界が自分を圧迫することに耐えかね、自分の世界と周囲の世界との間に距離をとった状態が「自閉」であると説明した。

「自閉症」に関してはカナー（L. Kanner）の早期幼児自閉症（early infantile autism）やアスペルガー（H. Asperger）の自閉性精神病質がある。カナーは「幼児の行動特性をプロイラーの用語を転用してあらわそうとした（笠原嘉）」と言われているが、これが精神病理学で言う「自閉」とはかなり異なった概念であるために「自閉症（Autism）」が誤解されてきたことは極めて遺憾である。カナーの言う早期幼児自閉症を含む「自閉症（あるいは自閉性障害）」は、「社会性や他者とのコミュニケーション能力の発達が遅滞する発達障害」と言えるものでDSMの第一軸の「通常、幼児期、小児期、又は青年期に初めて診断される障害」における広汎性発達障害（pervasive developmental disorders）に位置づけられており、自閉性障害の基本的特徴は3歳位までに症状があらわれ、「対人相互反応の質的な障害」「意思伝達の著しい異常

またはその発達の障害」「活動と興味の範囲の著しい限局性」という3つを主な特徴とする行動的症候群を言うとしている。したがって、「うつ病」や「ひきこもり」あるいは「内気な性格」を指して自閉症と呼ぶことは誤りである。近年これに知的障害や言語障害を伴わない高機能自閉症（アスペルガー症候群、またはアスペルガー障害）などを「高機能自閉症（アスペルガータイプ）」と呼ぶがこれらの一部には「ひきこもり」状態を示すことがある。

2. フロイトが示した「ひきこもり」に近い概念

冒頭に述べたように「ひきこもり」は精神病理学的概念に基づくものではないが「自閉」はある意味でその先駆的な理論提供をしたと言えなくもない。とは言え再度お断りするが「ひきこもり」は精神医学的診断に馴染むものではない。「ひきこもり」状態を心理的防衛機制ととらえたのはフロイトである。フロイトは自我を壊さないようにしている無意識的な対処方法を自我防衛機制と考え、「逃げる」という対処方法を「逃避機制」として取り上げた。この逃避機制には「現実逃避する」ものや「非現実（空想）に逃避する」ものもあるほか「疾病に逃避する」など様々なものがある。「現実逃避」とは俗に言えば「忙しい、忙しい」といって直面して解決しなければならない問題を避けてしまうものであり、「非現実（空想）逃避」は現実離れをすることで問題を避けてしまうやり方である。「疾病逃避」とは身体の不調をことさら大きく言うことで現実を避けようとする心理的機制である。これらが意識的であれば「詐病」と言うことになる。

こうした防衛機制には精神生活の妨げになる欲求不満や葛藤からくる緊張を押さえ込む抑圧のほか投射、同一視、合理化、代償、昇華などがあるが、これらが微妙に絡み合って「ひきこもり」状態になることはしばしば経験される。それは他者や社会との関係をうまく構築できないために“現実から引き下がる”状態と言えるものであり、“明快”な逃避ではなく「ひきこもる」逃避と言えよう。この“現実から引き下がる”行動を適応的であるか否かという視点で見ると、自我の崩壊を防ぐ意味では適応的行動であり現実社会と離れているという意味では不適応的行動ということができる。

3. わが国における「ひきこもり」関連調査から

国立精神・神経センター精神保健研究所が2000年から行った全国調査「地域精神保健活動における介入のあり方に関する研究」（主任研究者：国立精神・神経センター精神保健研究所社会復帰相談部長伊藤順一郎）では「さまざまな要因によって社会的な参加の場がせばまり、就労や就学などの自宅以外での生活の場が長期にわたって失われている状態」と定義した。この伊藤報告を踏まえて『厚生労働省「社会的ひきこもり」に関する相談・援助状況実態調査報告（ガイドライン公開版）』や『「ひきこもり」対応ガイドライン』を編纂した。また、吉川武彦を主任研究者として始めた世界精神保健日本調査（WFMH）の一環である2002年から2005年の間の厚生労働科学研究主任研究者川上憲人「こころの健康についての疫学調査に関する研

究」の2006年報告では、概ね上記に相当する「ひきこもり」を抱える家族は全国推計で26万世帯と積算した。

この川上報告は、調査対象地域が岡山県・長崎県・鹿児島県などに限られており全国調査ではない。また、この調査では「ひきこもり」を精神障害としてとらえての調査はしていないだけでなく「統合失調症は含まれていない」としているにもかかわらず、同時に調査されたDSM-による精神障害診断について検討を加えた結果、調査デザインに含まれる「気分障害」「不安障害」「物質関連障害」「間歇性爆発障害」のいずれかの診断基準を満たす状態にあったものが「ひきこもり」のなかの6割を超えていたとしていることや、また「ひきこもり」状態にあったときにこの診断基準を満たす状態にあったと考えられる人が4割を超えていたとされた。

伊藤報告と川上報告はまったく異なった手法で行われた調査ではあるが、報告の結果の活用に関しては“何らかの形で、精神医学的ないしは精神保健学的手法によってこれら「ひきこもり」に対処すべきではないか”ということが調査の意図にあると考えていい。

その趣旨で言うと2007年度から2009年度に取り組みされた厚生労働科学研究「思春期のひきこもりをもたらす精神疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究(主任研究者齋藤万比古)」も同様であるが、この齋藤報告では「ひきこもりとは、様々な要因の結果として、社会参加(義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など)を回避し、原則的には6か月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態(他者と関わらない形での外出をしている場合も含む)」と定義としている。この調査も「全国5か所の精神保健福祉センターにひきこもりの相談に訪れた16歳から35歳の方(本人の来談があったもの)」という調査条件によって得られた対象の分析であって、厚生労働省が意図する「ひきこもり」へのこれによれば、第1群(統合失調症、気分障害:薬物療法が中心)第2群(広汎性発達障害や精神遅滞:生活・就労支援が中心)第3群(パーソナリティ障害や適応障害:心理療法的アプローチが中心)の概ね3群に分けられたと報告されているように、そこには「ひきこもり」への対処として先に述べた“何らかの形で、精神医学的ないしは精神保健学的手法によってこれら「ひきこもり」に対処すべきではないか”と考えて調査が行われたことがわかる。

4. 考察されなければならないこと

オーストラリアでは「安心できる場所に退避する状態(Association of Relatives And Friends of the Mentally Ill)」を「ひきこもり」と考えているといい、またBBC(英国放送協会)が日本の「ひきこもり」についての番組を放映した後に、視聴者から同じような経験を持ったことがあるという当事者や家族からのコメントがあったとも言う。韓国や台湾あるいは香港にも同様な現象が見られるという報告もある。それぞれがいつ頃から言われ始めたかははっきりしないが、「ひきこもり」という用語がわが国で一般化したのは平成年代に入ってから、

ほぼ 20 年が経過したと考えられる。

しかしながら、ともすると「ひきこもり」が精神病理学的な要因によって惹起されるある種の特定の状態であるかのごとくとらえられてきたわが国では、その対策となると、まさに“何らかの形で、精神医学的ないしは精神保健学的手法によってこれら「ひきこもり」に対処すべきではないか”という回答を引き出すために調査が行われてきたか、あるいは調査対象を得ることに困難を感じたがゆえに、“精神保健関連施設である”保健所や精神保健福祉センター等を媒体にして調査対象を得るという手法に頼らざるを得なかったために、すでに得られた対象にバイアスがあったと考えるべきである。

その意味では、今回の内閣府の調査は一般社会を母体としてとらえたものであり、そこにこれまでの厚生労働省関連の調査との違いがある。すでにたびたび述べたように「ひきこもり」は精神医学的診断ではないが、他者や社会との関係をうまく構築できないために“現実から引き下がる”状態であり、これについては精神分析学が自我防衛機制としての「逃避機制」として明らかにしてきた。さらに逃避機制には「現実逃避」や「非現実逃避」あるいは「疾病逃避」があることも指摘したが、こうした“明快”な逃避ではなく「現実から引き下がる」形で「ひきこもる」逃避機制があることが、いま明らかになりつつある。この「引き下がる」行動を適応的であるか否かという視点で見ると、自我の崩壊を防ぐ意味では適応的行動であり現実社会と離れているという意味では不適応的行動と言えようか。

やはり先に挙げた疾患に伴う「ひきこもり」のほかに家族関係のもつれから「ひきこもり」状態になるものもあり、その一端を示せば家族からの強い過干渉によって自己肯定感をもてないまま成長し、他者との関係構築が不得手となったものに「自閉」という精神病理を見いだすことは無理であろう。さらにこのような人が自分を卑下し自己の無能力感を抱き罪悪感をもつようになったからと言って「うつ病」と診断することは許されないはずである。さらに資本主義社会に対する嫌悪感や違和感があり現代社会に背を向ける形で「ひきこもり」状態に入ったものを精神病理と言うこともできない。

今回の内閣府の調査結果をこれまでの厚生労働省関連の調査結果と単純に比較してその数値をあげつらうのではなく、ましてや「ひきこもり」は全国に 万人いるといったとらえ方をすることなく、「ひきこもり」をより深く分析するための一石として活用されることを切に望むものである。

3 松井豊・渡部麻美「社会心理学の立場から」

筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授

松井 豊

日本学術振興会 特別研究員 (PD) ・東京学芸大学

渡部 麻美

(1) ひきこもり類型の地域差について

概要で述べられたように、本報告書ではひきこもり群が全国で 1.8%、ひきこもり親和群が 4.0%との構成比であることが明らかになった。一方、厚生労働省が発表した「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」ではひきこもり者がいる家庭の比率を 0.56%と報告している。また、2007 年に本報告書の調査と同一の項目でほぼ同じ調査法で実施された東京都の調査 (東京都青少年・治安対策本部、2008) では、ひきこもり群の比率を 0.72%と報告している (有効回収率 51.2%)。さらに、本調査後に同一項目を用いて郵送調査で実施された奈良県の調査 (奈良県くらし創造部青少年・生涯学習課、2010) では同比率を 1.4%と報告している (有効回収率 47.7%)。

こうした調査結果の相違が生じた理由は、いくつかの観点から説明が可能である。

第 1 は、質問内容や定義の相違である。厚生労働省の調査では、ひきこもりを抽出する際に、「あなたの子供のうちで、現在、仕事も学校もゆかず、かつ家族以外の人と交流せず、6ヶ月以上自宅にひきこもっているお子さんがいますか。」と尋ねており、本調査と比べると「家族以外の人と交流せず」という厳しい条件が加わっている。このため、抽出対象が限定されたものと考えられる。

第 2 に、実施方式の相違が指摘される。本調査は非対面方式 (訪問留め置き) の本人の自己報告によるもので、厚生労働省は家族の判断による。自己報告であれば、上記の状態にある人はそのまま回答するが、対面で調査員に訪問された場合には、「自分の子どもはひきこもっていると言えそうだが、この人に話すのは恥ずかしい」というバイアス (調査員効果) が働く可能性がある。

第 3 に、回収率の相違が指摘される。本調査の回収率は 65.7 %で、厚生労働省の調査では 55.1 %である。ひきこもり家庭の方が調査拒否をしやすいという非標本抽出誤差が考えられるので、回答率が高くなるほど、ひきこもり者の回答が増えやすい。

第 4 に、ひきこもり群の構成比に地域差が存在する可能性が考えられる。本調査は全国調査を行っているが、厚生労働省は 4 県のデータに立脚し、東京都や奈良県は、同都県内のデータである。これらのデータに相違が見られるのは、ひきこもり群の構成比に地域差がある可能性を示唆している。

そこで、本節では追加解析として、ひきこもり群の地域差について分析を行った。

表1・表2は、都市規模別、地域別に、ひきこもり群とひきこもり親和群の構成を算出した結果である。都市規模別にみると、「小都市」でややひきこもり群が多い傾向（2.7%）がみられるが、統計的に見ると有意な差ではなかった。

地域別にみると、ひきこもり群は「北海道」で5.0%、「東北」で3.0%と多く、ひきこもり親和群は「東北」で6.0%と多い傾向が見られた。

表1 都市規模×ひきこもり類型

		ひきこもり群	親和群	一般群	合計
大都市	度数	13	34	780	827
	%	1.6%	4.1%	94.3%	100.0%
中都市	度数	13	29	837	879
	%	1.5%	3.3%	95.2%	100.0%
小都市	度数	15	19	512	546
	%	2.7%	3.5%	93.8%	100.0%
町・郡部	度数	18	49	963	1030
	%	1.7%	4.8%	93.5%	100.0%
合計	度数	59	131	3092	3282
	%	1.8%	4.0%	94.2%	100.0%

表2 地域×ひきこもり類型

		ひきこもり群	親和群	一般群	合計
北海道	度数	6	4	111	121
	%	5.0%	3.3%	91.7%	100.0%
東北	度数	7	14	212	233
	%	3.0%	6.0%	91.0%	100.0%
関東	度数	19	45	1016	1080
	%	1.8%	4.2%	94.1%	100.0%
中部	度数	8	21	627	656
	%	1.2%	3.2%	95.6%	100.0%
近畿	度数	8	18	469	495
	%	1.6%	3.6%	94.7%	100.0%
中国・四国	度数	6	15	263	284
	%	2.1%	5.3%	92.6%	100.0%
九州	度数	5	14	394	413
	%	1.2%	3.4%	95.4%	100.0%
合計	度数	59	131	3092	3282
	%	1.8%	4.0%	94.2%	100.0%

参考までに、東京都の回答者に限定して、ひきこもり群の構成比を算出したが、2.0%となり(表3)、他の地域に比べてとくに高い比率にはなっていなかった。

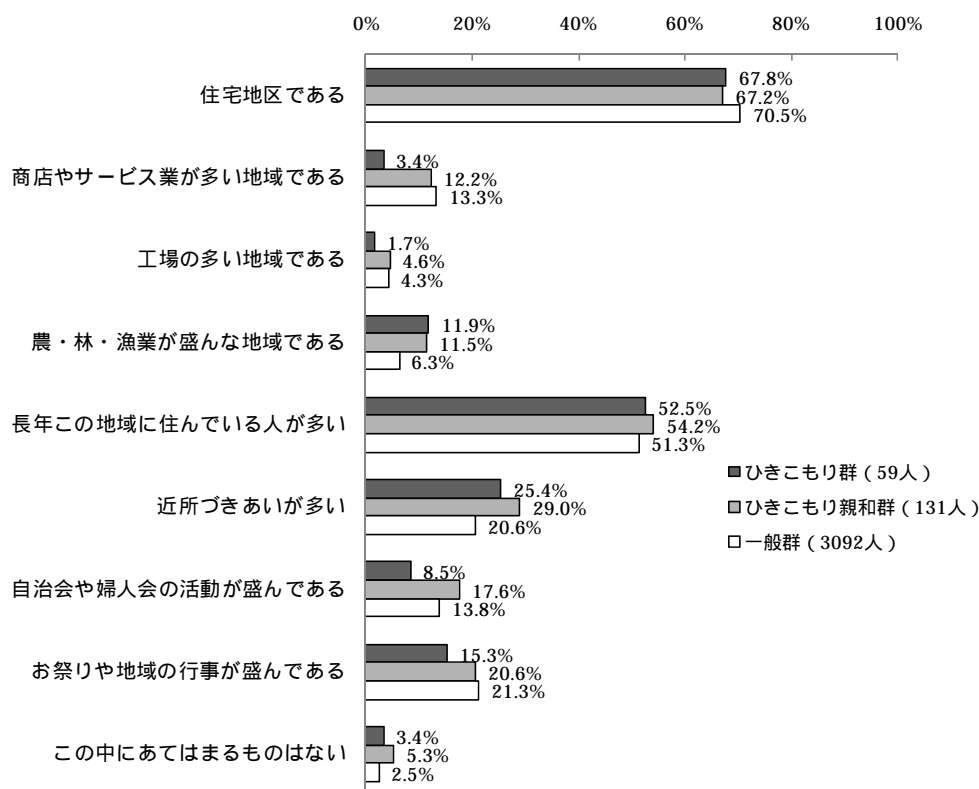
表3 東京都に限定したひきこもり類型の分布

〔ひきこもり類型〕

	該当数 (東京都)	ひきこも り群	ひきこも り親和群	一般群
【 総 数 】	294	6	9	279
	100.0%	2.0%	3.1%	94.9%

そこで、回答者が認知している地域特性を3群間で比較した。その結果（図1再掲）ひきこもり群やひきこもり親和群では自分が住んでいる地域を「農・林・漁業が盛んな地域である」とか「近所づきあいが多い」と回答する比率が高かった。

図1 Q7 住んでいる地域の特徴



以上のように、本調査のデータでは、北日本でひきこもり群が多いことが明らかになった。しかし、ひきこもり群が最も少ない「中部」「九州」地区でもひきこもり群の比率は1.2%になっていた。したがって、本調査の結果が他の調査の結果よりひきこもり群の比率が高かった理由は地域差では説明ができない。上記の通り、各調査における質問内容や定義、実施方法や回収率の相違などによるものと推定される。

ただし、ひきこもり群は、北日本に相対的に多く、ひきこもっている人は第1次産業が盛んで近所づきあいの多い地域に住んでいると意識していることが明らかになった。

(2) ひきこもり群の心理的特徴やコミュニケーションの特徴について

本調査ではひきこもり状態にある人々をひきこもり群とし、実際にはひきこもっていないが、「ひきこもり」に共感し親和的な意識を持つ人々をひきこもり親和群と定義して、他の人々との違いを比較した。本節では、ひきこもり群の心理的特徴やコミュニケーションの特徴についてまとめる。

3群間の分析の結果、ひきこもり群には男性が多く、親と同居し、親が生計を担っており、勤めていない人が多かった。携帯電話による通話やメールは他群に比べて少ないものの、6割前後が行っていた。パソコンでのメールやウェブサイトへの閲覧・書き込みは逆に、他群に比べてやや多かった。ふだんの悩み事は知人友人や配偶者に話すことは他群に比べて少なく、カウンセラー・精神科医に話す人が17%と多くなっていた。精神的な病気で入院・通院した経験は際だって多かった。初対面の人と話すことが苦手で、人とのつきあい方が不器用であると悩み、自分の感情を表に出すことが苦手で、人と会話するのは煩わしいと感じ、誰とも話さずに日を過ごす人が多かった。

対人関係の苦手意識の背後には、「過去の知り合いや縁者に信頼できる人がいない」という人間不信や小中学校時代に友人が少なく、いじめられ、我慢をした経験があると推定される。

このような特徴は本調査と類似した形式で実施された東京都の調査（東京都青少年・治安対策本部、2008）ともほぼ一致している。

これらの結果から、ひきこもり状態にある人の中には、精神疾患や対人関係に対する極端な苦手意識によって社会的活動を行えず、在宅せざるを得ない人々が多く含まれているものと推定される。

ひきこもるきっかけは不登校や職場不適應など多様であっても、人づきあいが極端に苦手で、人との接触を恐れる態度は共通している。カウンセラーや精神科医が話し相手になっている人も2割弱にとどまっており、友人関係や地域社会とのつながりは薄い。この人々の対人関係に対する苦手意識や人間不信感に対して、それぞれの地域社会が何らかの対応や対策をとることが必要と考えられる。この対策は、精神疾患を持つ人を地域社会がどのように受け入れていくかという問題にもつながっている。

その際、ひきこもる人々が採っているパソコンメールやwebサイトなどのコミュニケーション手段も積極的に利用することが求められよう。

(3) ひきこもり親和群の心理的特徴について

本調査では、実際にはひきこもっていないにもかかわらず、ひきこもる人の気持ちがわかるとか、自分でもひきこもりたいと思う人々を抽出し、ひきこもり親和群と名付けて詳細な分析を行った。その分析結果から、これらの方たちの特徴を整理する。

ひきこもり親和群は女性が多く、年齢は若い。在学中の人が多く（37%）、父母との同居や主生計者に父母が一般群に比べて多いのは、若い女性が多いためであろう。地域的には第1次産業が盛んで、近所づきあいが多い地域に居住している人がやや多い。精神的な病気での通院・入院歴は17%と、ひきこもり群（37%）ほどではないが、一般群（5%）より多い。

ひきこもり親和群の心理的特徴をみると、「生きるのが苦しいと覚えることがある」や「人に会うのが怖いと覚える」や「絶望的な気分になることがよくある」「同じ行動を何度も繰り返してしまふ」などのうつ傾向や罪悪感、強迫傾向が強く、「壁を蹴ったり叩いたりしてしまふ」（25%）「大声を上げて怒鳴り散らすことがある」（21%）「家族を殴ったり、蹴ったりしてしまふ」（11%）という暴力傾向も強い。「自分の周辺には理不尽と思うことがたくさんある」という回答が多いことも暴力傾向と整合している。「人とのつきあい方が不器用なのではないかと悩む」という対人関係の苦手意識も高めである。

ひきこもりの方に関する報道には、ひきこもっている人が暴力的であることを印象づける内容が多いが、実際には暴力的であるのはこのひきこもり親和群であることが明らかになった。小学校中学校の体験を見ても、「学校の勉強について行けなかった」「学校の先生とうまくいかなかった」「友だちをいじめた」などは、3群の中でももっとも経験が多かった。

ひきこもり親和群の第1の特徴は、うつ傾向と暴力傾向の共存にあると考えられる。

さらにこの群には、親子関係に一貫した傾向が見られる。自分の家族関係について、「私の家族は暖かい」「家族とはよく話している」「家族から十分に愛されていると思う」「私たち家族は、仲がよいと思う」などの、家族との情緒的なつながりを表す意識はいずれも、ひきこもり群と同じ程度に弱かった。ひきこもり群と同様にひきこもり親和群は、家族との情緒的な絆が弱いのである。

親に対する意識では、「たとえ親であっても自分のやりたいことに口出ししないで欲しい」や「自分の生活のことでひとから干渉されたくない」などの独立的な意識が見られるが、「大事なことを決めるときは、親や教師の言うことに従わないと不安だ」という依存的な傾向も見られ、親に対して両価的（ambivalent）な態度を有している。

この親に対する態度の背景には、これまでの親子関係が影響していると推定される。小中学校時代の家庭では、「我慢をすることが多かった」や「親はしつけが厳しかった」「自分で決めて相談することはなかった」が他群に比べて多かった。またひきこもり群と同様に、「困ったとき親は親身に助言してくれた」や「親とは何でも話すことができた」などは少なかった。小中学校時代は親から厳しいしつけを受けながら、親とのコミュニケーションが不足している親子関係がうかがえる。

このように、ひきこもり親和群の親子関係は子ども時代に、親から厳しくコミュニケーションの乏しいしつけを受けたために、現在は家族との情緒的な絆が弱く、親からの干渉に対して両価的な態度を有している点に、特徴が見られる。この親子関係のあり方が、ひきこもり親和群の第2の特徴である。

最後に、小中学校時代の友人関係を見ると、「我慢をすることが多かった」「友達にいじめられた」「いじめを見て見ぬふりをした」などの経験がひきこもり群と同様に多い。しかし、ひきこもり群に比べれば「友達とよく話した」や「親友がいた」という経験が多い点に、ひきこもり親和群の特徴が見られる。現在の悩み事の相談相手を見ても、「友人・知人」が一般群と同程度に多く（58%）、ひきこもり群（37%）と際だって異なっている。

これらの結果から見ると、ひきこもり親和群が実際にはひきこもらずにすんでいる1つの理由は、話のできる友人がいたことにあるものと推定される。この友人関係がひきこもり群の第3の特徴である。

ひきこもり親和群は、小中学校時代に厳しくしつけられコミュニケーションの少ない親子関係を体験し、現在も親に対して情緒的な絆を感じていないが、友人関係に支えられて、ひきこもらずにすんでいるという心理機制がうかがえる。しかし、この群はうつ傾向と暴力傾向とを共在させており、ひきこもりとは別の問題を抱えているものと推定される。

調 査 票 (単 純 集 計 付)

[Q1 ~ Q13はすべての方がお答えください。]

選択肢の左側等に、単純集計の結果を記載している。

Q1 あなたの性別をお答えください。(はひとつだけ)

47.6 1.男性 52.4 2.女性

Q2 あなたの年齢をお答えください。(はひとつだけ)

18.4 1.15歳～19歳 18.3 3.25歳～29歳 26.4 5.35歳～39歳
15.5 2.20歳～24歳 21.4 4.30歳～34歳

Q3 現在あなたと同居しているご家族に をつけてください。(はいいくつでも)

49.1 1.父 9.2 4.姉 6.3 7.祖父 32.4 10.ご自身のお子さん
57.1 2.母 12.4 5.弟 12.7 8.祖母 4.4 11.その他の人()
9.7 3.兄 12.7 6.妹 37.5 9.配偶者 5.4 12.同居家族はいない(単身世帯)

Q4 現在同居している人は合計で何人ですか。あなたも含めた人数を記入してください。(数字で具体的に)

平均3.78 人

Q5 あなたの家の生計を立てているのは主にどなたですか。生計を立てている方が複数いる場合は、もっとも多く家計を負担している人をお答えください。また、主に仕送りで生計を立てている方は、その仕送りを主にしてくれている人をお答えください。(はひとつだけ)

25.5 1.あなた自身 19.7 4.配偶者 1.1 7.その他()
44.0 2.父親 0.9 5.きょうだい 0.2 8.生活保護などを受けている
8.3 3.母親 0.3 6.他の家族や親戚

0.1 無回答

Q6 あなたの家の暮らし向き(衣・食・住・レジャーなどの物質的な生活水準)は、世間一般と比べてみて、上の上から下の下までのどれにあたると思われますか。あなたの実感でお答えください。(はひとつだけ)

0.7 1.上の上 21.8 4.中の上 7.0 7.下の上
1.3 2.上の中 40.9 5.中の中 5.2 8.下の中
2.5 3.上の下 17.9 6.中の下 2.4 9.下の下

0.2 無回答

Q7 あなたがお住まいの地域にあてはまるものにすべて をつけてください。(はいいくつでも)

70.3 1.住宅地区である 51.5 5.長年この地域に住んでいる人が多い
13.1 2.商店やサービス業が多い地域である 21.0 6.近所づきあいが多い
4.2 3.工場の多い地域である 13.9 7.自治会や婦人会などの活動が盛んである
6.6 4.農・林・漁業が盛んな地域である 21.2 8.お祭りや地域の行事が盛んである
2.6 9.この中にあてはまるものはない

0.1 無回答

Q8 これまでに以下の病気やけがで通院や入院をしたことはありますか。通院・入院したことのある病気をつけてください。(はいいくつでも)

1.7 1.心臓や血管の病気 5.6 4.精神的な病気 18.4 7.骨折・大ケガ
4.0 2.肺の病気 14.7 5.目・耳の病気 11.0 8.その他の病気
9.5 3.胃や腸の病気 16.4 6.皮膚の病気 ()
46.8 9.あてはまるものはない

0.9 無回答

Q9 あなたは現在学校に通っていますか。(はひとつだけ)

22.8 1.現在在学している 73.2 2.すでに卒業している 3.5 3.中退した 0.2 4.休学中である

0.3 無回答

Q10 あなたが最後に卒業(中退を含む)した、または現在在学している学校はどれですか。(はひとつだけ)

6.5 1.中学校 12.6 4.高等専門学校・短期大学
37.0 2.高等学校 28.1 5.4年制大学・大学院
14.5 3.専門学校 0.9 6.その他()

0.3 無回答

Q11 あなたは小学校や中学校の頃に、学校で次のようなことを経験したことがありますか。あてはまるものすべてに をつけてください。(はいくつでも)

84.0 1.友達とよく話した 24.1 6.友達にいじめられた
71.0 2.親友がいた 16.9 7.いじめを見て見ぬふりをした
6.4 3.友達というよりも一人で遊んでいる方が楽しかった 22.4 8.我慢をすることが多かった
6.1 4.不登校を経験した 15.7 9.学校の勉強についていけなかった
13.5 5.友達をいじめた 10.6 10.学校の先生との関係がうまくいかなかった
2.4 あてはまるものはない

0.1 無回答

Q12 あなたは小学校や中学校の頃に、家庭で次のようなことを経験したことがありますか。あてはまるものすべてに をつけてください。(はいくつでも)

36.4 1.親とは何でも話すことができた 21.4 11.引越しや転校をした
25.3 2.親はしつけが厳しかった 2.5 12.大きな病気をした
38.4 3.困ったときは、親は親身に助言をしてくれた 7.0 13.両親が離婚した
10.0 4.何でも自分一人で決めて、家族に相談することはなかった 2.9 14.親と死別した
0.9 15.親から虐待を受けた
2.1 5.将来の職業などを親に決められた 6.2 16.親が過保護であった
7.1 6.家族に相談しても、あまり役に立たなかった 4.8 17.親が過干渉であった
10.4 7.親は学校の成績を重視していた 7.3 18.経済的に苦しい生活を送った
49.2 8.小さい頃から習い事やスポーツ活動に参加していた 15.7 19.我慢をすることが多かった
6.4 9.親と自分との関係がよくなかった
9.8 10.両親の関係がよくなかった 7.0 20.あてはまるものはない

0.0 無回答

Q13 あなたは現在働いておられますか。(はひとつだけ)

40.4 1.勤めている(正社員) 3.8 2.勤めている(契約社員) 2.2 3.勤めている(派遣社員) 11.6 4.勤めている(パート・アルバイト(学生のアルバイトは除く)) 1.7 5.自分で店、会社を経営している 1.8 6.自由業(個人で専門知識や技術を生かした職業)をしている 9.4 7.専業主婦・主夫 22.3 8.学生 0.6 9.家事手伝いをしている 0.3 10.浪人として予備校などに通っている 1.4 11.その他の仕事()	0.5 12.派遣会社などに登録しているが、現在は働いていない 4.0 13.無職
---	--

0.1 無回答

Q14へ

【Q13で、12.または13.とお答えになった方のみ、Q14～Q16に回答してください。】

(n=148人)

Q14 あなたはいままでに働いていたことはありますか。(はひとつだけ)

45.9 1.正社員として働いていた 25.0 4.パート・アルバイトとして働いていた
8.1 2.契約社員として働いていた (学生時代の経験は含めません)
5.4 3.派遣社員として働いていた 14.9 5.働いたことはない

0.7 無回答

(n=148人)

Q15 現在就職または進学を希望していますか。(はひとつだけ)

64.9 1.就職希望 9.5 2.進学希望 25.0 3.どちらも希望していない

0.7 無回答

(n=148人)

Q16 現在就職活動をしていますか。(はひとつだけ)

50.7 1.している 48.6 2.していない

0.7 無回答

Q17へ
進んでく
ださい。

【Q17～Q20はすべての方がお答え下さい。】

Q17 次に挙げられた職業に関する意見の中で、あなたの考えにあてはまる番号に をつけてください。
(はひとつの項目につきひとつ)

1. いくつか必ず自分にふさわしい仕事が見つかると思う

30.2 1.はい 39.2 2.どちらかといえばはい 22.8 3.どちらかといえばいいえ 7.5 4.いいえ

0.3 無回答

2. いくつか自分の夢を実現させる仕事に就きたい

38.6 1.はい 39.2 2.どちらかといえばはい 13.4 3.どちらかといえばいいえ 8.3 4.いいえ

0.5 無回答

3. 仕事をしなくても生活できるのなら、仕事はしたくない

19.5 1.はい 22.8 2.どちらかといえばはい 28.4 3.どちらかといえばいいえ 29.0 4.いいえ

0.2 無回答

4. 定職に就かない方が自由でいいと思う

4.6 1.はい 10.8 2.どちらかといえばはい 27.1 3.どちらかといえばいいえ 57.1 4.いいえ

0.3 無回答

Q18 ふだんご自宅にいるときによくしていることすべてに をつけてください。(はいいくつでも)

81.0 1.テレビを見る 32.7 5.ゲームをする 49.9 9.インターネット
5.6 2.ラジオを聴く 16.4 6.勉強をする
39.0 3.本を読む 8.2 7.仕事をする 1.6 10.あてはまるものはない
19.6 4.新聞を読む 36.2 8.家事・育児をする

0.1 無回答

Q19 以下に挙げられた通信手段の中で、ふだん利用しているものすべてに をつけてください。(はいくつでも)

- | | |
|-----------------------|---|
| 37.9 1. 固定電話 | 5.7 7. チャットまたはメッセージ |
| 13.3 2. ファックス | 23.9 8. ウェブサイトまたはウェブログの閲覧・書き込み |
| 84.6 3. 携帯電話での通話 | 18.0 9. ソーシャル・ネットワーキング・サービス(mixiなど)の閲覧・書き込み |
| 90.1 4. 携帯電話でのメール | 2.3 10. ツイッター |
| 27.1 5. パソコンでのメール | 7.8 11. オンライン・ゲーム |
| 10.6 6. 電子掲示板の閲覧・書き込み | 1.1 12. あてはまるものはない |

0.1 無回答

Q20 ふだんどのくらい外出しますか。(はいひとつだけ)

- | | |
|--------------------------|--------------------------------------|
| 74.8 1. 仕事や学校で平日は毎日外出する | 3.0 5. ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する |
| 7.1 2. 仕事や学校で週に3~4日外出する | 1.6 6. ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける |
| 6.0 3. 遊び等で頻繁に外出する | 0.2 7. 自室からは出るが、家からは出ない |
| 7.0 4. 人づきあいのためにときどき外出する | 0.2 8. 自室からほとんど出ない |

0.1 無回答

【Q20で、5~8に をつけた方のみ、Q21~Q26の質問に回答してください。】

(n=163人)

Q21 現在の状態になったのは、あなたが何歳の頃ですか。(数字で具体的に)

平均26.69 歳 1.8 無回答

(n=163人)

Q22 現在の状態となってどのくらい経ちますか。(はいひとつだけ)

20.2 1. 6ヶ月未満	13.5 4. 3年~5年
17.8 2. 6ヶ月~1年	8.6 5. 5年~7年
22.7 3. 1年~3年	15.3 6. 7年以上

1.8 無回答

(n=163人)

Q23 現在の状態になったきっかけは何ですか。(はいくつでも)

4.9 1. 不登校(小学校・中学校・高校)	8.6 6. 人間関係がうまくいかなかった
3.1 2. 大学になじめなかった	友人・父・母・兄弟・ その他の人()
1.2 3. 受験に失敗した(高校・大学)	
10.4 4. 就職活動がうまくいかなかった	16.6 7. 病気(病名:)
14.1 5. 職場になじめなかった	28.2 8. 妊娠した
	31.3 9. その他()

2.5 無回答

(n=163人)

Q24 現在の状態について、関係機関に相談したいと思いませんか。(はいひとつだけ)

6.1 1. 非常に思う 8.6 2. 思う 14.1 3. 少し思う 70.6 4. 思わない

0.6 無回答

6ページのQ27へ進んでください。

(n=163人)

Q25 現在の状態について、どのような機関なら、相談したいと思えますか。(はいいくつでも)

- 30.1 1. 親身に聴いてくれる
- 16.0 2. 医学的な助言をくれる
- 12.9 3. 心理学の専門家がいる
- 19.6 4. 精神科医がいる
- 17.8 5. 同じ悩みを持つ人と出会える
- 11.0 6. 匿名で(自分の名前を知られずに)相談できる
- 26.4 7. 無料で相談できる
- 1.8 8. 公的機関の人や医療の専門家ではない民間団体(NPOなど)である
- 2.5 9. 自宅に専門家が来てくれる
- 23.9 10. 自宅から近い
- 19.6 11. あてはまるものはない
- 28.8 12. 相談したくない

1.2 無回答

(n=47人)

SQ25_1 相談したくないと思う理由は何ですか。(はいいくつでも)

- 12.8 1. 自分のことを知られたくない
- 2.1 5. 行ったことを人に知られたくない
- 23.4 2. 行っても解決できないと思う
- 6. お金がかかると思う
- 4.3 3. 何をきかれるか不安に思う
- 34.0 7. その他()
- 4.3 4. 相手にうまく話せないと思う
- 8. 相談機関が近くにない
- 31.9 9. あてはまるものはない

- 無回答

(n=114人)

Q26 現在の状態について、関係機関に相談したことはありますか。(はいひとつだけ)

- 36.0 1. ある
- 64.0 2. ない

Q27へ進んでください。

- 無回答

(n=41人)

SQ26_1 どのような相談機関に相談しましたか。相談したことがある機関に をつけてください。(はいいくつでも)

- 1. 何も利用したことがない
- 63.4 8. 病院・診療所
- 4.9 2. 適応指導教室
- 7.3 9. 発達障害者支援センター
- 7.3 3. 教育相談所・相談室などの相談機関
- 4.9 10. 民間施設 (いわゆる「フリースクール」など)
- 7.3 4. 児童相談所・福祉事務所などの児童福祉機関
- 9.8 11. 上記以外の心理相談・カウンセリングなどをする民間の機関
- 31.7 5. 職業安定所(ハローワーク)・ジョブカフェ・地域若者サポートステーションなどの就労支援機関
- 2.4 12. その他の施設・機関 (具体的に)
- 22.0 6. 保健所・保健センター
- 9.8 7. 精神保健福祉センター

- 無回答

【これ以降の質問はすべての方がお答えください。】

Q27 次にあげられたことについて、あなた自身にあてはまる数字に をつけてください。(は各項目につきひとつ)

1. 私には持って生まれたすばらしい才能がある

10.6 1.はい 21.4 2.どちらかといえばはい 37.1 3.どちらかといえばいいえ 30.9 4.いいえ

0.1 無回答

2. 私は他に並ぶ人がいないくらい、特別な存在である

5.7 1.はい 13.0 2.どちらかといえばはい 30.8 3.どちらかといえばいいえ 50.3 4.いいえ

0.2 無回答

3. 大事なことを決めるときは、親や教師の言うことに従わないと不安だ

3.8 1.はい 25.4 2.どちらかといえばはい 35.6 3.どちらかといえばいいえ 35.1 4.いいえ

0.1 無回答

4. 大事なことを自分ひとりで決めてしまうのは不安だ

15.4 1.はい 39.7 2.どちらかといえばはい 24.1 3.どちらかといえばいいえ 20.7 4.いいえ

0.1 無回答

5. 初対面の人とすぐに会話できる自信がある

22.5 1.はい 33.8 2.どちらかといえばはい 28.9 3.どちらかといえばいいえ 14.8 4.いいえ

0.1 無回答

6. 人とのつきあい方が不器用なのではないかと悩む

14.7 1.はい 30.8 2.どちらかといえばはい 30.9 3.どちらかといえばいいえ 23.4 4.いいえ

0.1 無回答

7. 自分の感情を表に出すのが苦手だ

13.7 1.はい 31.2 2.どちらかといえばはい 30.1 3.どちらかといえばいいえ 24.9 4.いいえ

0.1 無回答

8. 周りの人ともめごとが起こったとき、どうやって解決したらいいかわからない

7.1 1.はい 24.2 2.どちらかといえばはい 40.8 3.どちらかといえばいいえ 27.8 4.いいえ

0.1 無回答

9. たとえ親であっても自分のやりたいことに口出ししないで欲しい

24.1 1.はい 41.5 2.どちらかといえばはい 24.6 3.どちらかといえばいいえ 9.7 4.いいえ

0.1 無回答

10. 自分の生活のことで人から干渉されたくない

32.7 1.はい 46.6 2.どちらかといえばはい 14.5 3.どちらかといえばいいえ 6.1 4.いいえ

0.0 無回答

11. 家や自室に閉じこもっていて外に出ない人たちの気持ちがわかる

12.1 1.はい 31.0 2.どちらかといえばはい 30.0 3.どちらかといえばいいえ 26.8 4.いいえ

0.1 無回答

12. 自分も、家や自室に閉じこもりたいと思うことがある

10.7 1.はい 19.5 2.どちらかといえばはい 25.3 3.どちらかといえばいいえ 44.4 4.いいえ

0.1 無回答

13. 嫌な出来事があると、外に出たくなくなる

15.4 1.はい 23.6 2.どちらかといえばはい 29.7 3.どちらかといえばいいえ 31.4 4.いいえ

- 無回答

14. 理由があるなら家や自室に閉じこもるのも仕方がないと思う

20.7 1.はい 40.0 2.どちらかといえばはい 23.5 3.どちらかといえばいいえ 15.8 4.いいえ

0.0 無回答

Q28 次にあげられたことの中で、あなた自身にあてはまるものすべてに をつけてください。(はいいくつでも)

- 33.4 1. 家族に申しわけないと思うことが多い
20.7 2. 生きるのが苦しいとを感じることもある
11.0 3. 死んでしまいたいと思うことがある
14.0 4. 絶望的な気分になることがよくある
8.6 5. 人に会うのが怖いと感じる
7.9 6. 知り合いに会うことを考えると不安になる
28.8 7. 他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる
15.2 8. 集団の中に溶け込めない
15.6 9. つまらないことを繰り返し確かめてしまう
10.4 10. 同じ行動を何度も繰り返ししてしまう
1.5 11. 食事や入浴の時間がいつもと少しでも異なると我慢できない
7.5 12. 自分の身体が清潔かどうか常に気になる
2.6 13. 家族を殴ったり蹴ったりしてしまうことがある
7.0 14. 壁や窓を蹴ったりたたいたりしてしまうことがある
1.2 15. 食器などを投げて壊すことがある
10.2 16. 大声を上げて怒鳴り散らすことがある
1.1 17. リストカットなどの自傷行為をしてしまうことがある
6.4 18. アルコールを飲まずにはいられないことがある
2.1 19. 何らかの薬を飲まずにはいられないことがある
9.2 20. パソコンや携帯電話がないと一時も落ち着かない
36.5 21. あてはまるものはない

0.2 無回答

Q29 次にあげられたことについて、あなた自身にあてはまる数字に をつけてください。(は各項目につきひとつ)

1. 身の回りのことは親にしてもらっている

10.5 1.はい 27.3 2.どちらかといえばはい 15.1 3.どちらかといえばいいえ 47.1 4.いいえ

0.1 無回答

2. 食事や掃除は親まかせである

17.8 1.はい 25.1 2.どちらかといえばはい 10.6 3.どちらかといえばいいえ 46.4 4.いいえ

0.1 無回答

3. 朝、決まった時間に起きられる

45.8 1.はい 28.4 2.どちらかといえばはい 15.2 3.どちらかといえばいいえ 10.6 4.いいえ

0.1 無回答

4. 深夜まで起きていることが多い

31.2 1.はい 28.0 2.どちらかといえばはい 20.3 3.どちらかといえばいいえ 20.5 4.いいえ

0.0 無回答

5. 昼夜逆転の生活をしている

4.4 1.はい 7.9 2.どちらかといえばはい 14.0 3.どちらかといえばいいえ 73.7 4.いいえ

0.1 無回答

6. 新聞の政治や経済・社会報道によく目を通す

16.9 1.はい 27.5 2.どちらかといえばはい 30.0 3.どちらかといえばいいえ 25.5 4.いいえ

- 無回答

7. 自分の周辺には理不尽と思うことがたくさんある

18.8 1.はい 34.7 2.どちらかといえばはい 30.5 3.どちらかといえばいいえ 15.7 4.いいえ

0.3 無回答

8. 誰とも口を利かずに過ごす日が多い

1.3 1.はい 3.7 2.どちらかといえばはい 18.5 3.どちらかといえばいいえ 76.5 4.いいえ

0.1 無回答

9. 人と会話をするのはわずらわしい

2.6 1.はい 10.8 2.どちらかといえばはい 26.5 3.どちらかといえばいいえ 60.0 4.いいえ

0.1 無回答

10. 過去の知り合いや縁者に信頼できる人はいない

2.9 1.はい 5.8 2.どちらかといえばはい 23.4 3.どちらかといえばいいえ 67.9 4.いいえ

- 無回答

11. 自分の精神状態は健康ではないと思う

4.7 1.はい 12.4 2.どちらかといえばはい 23.9 3.どちらかといえばいいえ 58.9 4.いいえ

0.1 無回答

12. 自分の今の状態について考えることがよくある

27.2 1.はい 33.5 2.どちらかといえばはい 17.5 3.どちらかといえばいいえ 21.7 4.いいえ

0.2 無回答

Q30 次にあげられたことは、あなたのご家族にどのくらいあてはまりますか。あてはまるものすべてにをつけてください。
(はいいくつでも)

66.4 1.私の家族は暖かい
69.2 2.家族とはよく話をしている
66.8 3.私たち家族は、仲がよいと思う
62.5 4.家族から十分に愛されていると思う
9.2 5.あてはまるものはない

0.3 無回答

Q31 あなたはふだん悩み事を誰かに相談したいと思えますか。(はいひとつだけ)

10.6 1.非常に思う 33.7 2.思う 37.7 3.少し思う 17.9 4.思わない

0.1 無回答

Q32 あなたはふだん悩み事を誰に相談しますか。(はいいくつでも)

43.8 1.親 1.8 5.祖父母 0.3 9.都道府県、市町村などの専門機関の人
21.6 2.きょうだい 2.9 6.学校の先生 2.6 10.ネット上の知り合い
64.6 3.友人・知人 14.8 7.職場の同僚・上司 2.2 11.その他の人()
29.2 4.配偶者 1.7 8.カウンセラー・精神科医 12.2 12.誰にも相談しない

0.2 無回答

【質問は以上で終了です。長い間ご協力いただきまして、誠にありがとうございました。】

若者の意識に関する調査企画分析会議構成員名簿

本調査の企画及び分析は、次の企画分析委員が行った。

〔企画分析委員（委員は五十音順）〕

- 座長 高塚雄介（明星大学大学院人文学研究科長）
委員 吉川武彦（中部学院大学大学院人間福祉学研究科 教授
独立行政法人国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所 名誉所長）
松井豊（筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授）
渡部麻美（日本学術振興会 特別研究員（PD）・東京学芸大学）

〔事務局〕

- 岡田太造（内閣府 子ども若者・子育て施策総合推進室 室長）
西沢立志（同 参事官（青少年支援担当））
塩島かおり（同 調査官（青少年支援担当））
臼井秀樹（同 参事官補佐（青少年支援担当））
荒巻由衣（同 主査（青少年支援担当））
大野順子（同 事務官（青少年支援担当））

〔委託先〕

新情報センター

所属及び役職名は、平成 22 年 7 月 1 日時点のものである。